甲府市文化財調査報告 44

塩部遺跡

2009

株式会社カワチ薬品
甲府市教育委員会

甲府市文化財調査報告 44

塩部遺跡

ー店舗建設に伴う発掘調査報告書ー

2009

株式会社カワチ薬品
甲府市教育委員会

序

全国各地で地域の歴史や伝統行事、さらには自然・景観をも取り上げ、積極的にその活用が講じられつつあります。地域にとってそれらがいかに重要であるか、あらためて実感するとともに、その保存・保護が現代に生きるものの重大な責務であると再認識いたします。

本書は、店舗建設に先立ち実施した『塩部遺跡』の発掘調査報告書であります。本遺跡は、市街西部に位置し、かつて豊かな水田地帯が広がっていましたが、近年一帯は宅地・商業化し、往時の景観から大きく様変わりしております。周辺には貴重な文化遺産が点在し、本調査に際しても弥生時代以来、古墳・平安時代に至る人々の生活の痕跡が確認され、連綿と続いてきた歴史の一端が明らかとなりました。

歴史あるこの地域で、今回、発掘調査が行われたことは誠に意義深く貴重なものであります。本書が学術研究深化への一助になるとともに、教育資料へも活用され、郷土の歴史と文化を再認識する機会となればこの上ない喜びであります。

末筆となりましたが、この度の記録保存に際し、貴重な歴史遺産に対する深いご理解を賜り、ご支援・ご協力を頂いた株式会社カワチ薬品及び関係各位に、感謝申し上げるとともに、衷心より厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

甲府市教育委員会

教育長　奥　田　　理

例　　言

1．本書は山梨県甲府市飯田一丁目 2249-1，2288 における塩部遺跡の発掘調査報告書である。
2．本調査は店舗建設に伴うものであり、開発主体者 株式会社カワチ薬品との協議を経て発掘調査に係る委託契約を締結し、甲府市教育委員会が主体となって実施した。
3．本調査から報告書作成に至る経費は開発主体者が負担している。
4．本遺跡に関わる調査は伊藤正彦（文化振興課文化財主事）が担当した。
5．調査の期間及び面積は以下のとおりであり、本調査終了後に引き続き整理作業に着手し、すべての作業が終了したのは平成 21 年 3 月であった。
　調査期間　平成 20 年 9 月 26 日～ 11 月 7 日　　面積　156㎡
6．本書の編集・執筆は、望月秀人（文化振興課長）を責任者とし、伊藤が行った。整理作業に係る遺物洗浄・注記・接合作業、遺物実測・図面浄書作業及び挿図・写真図版などの作成は、磯村美佳　須田泰美　高添美智子　滝沢みち子　中村知保　西久保民子　望月典子が行った。
7．本書に関わる出土遺物及び記録図面・写真等は甲府市教育委員会で保管している。
8．本書に関わる基準点測量・基準杭の設定及び写真測量業務は株式会社テクノプラニングに委託した。
9．発掘調査及び報告書作成に際して次の機関・諸氏からご指導ご協力を賜った。厚くお礼を申し上げる次第である。
　山梨県教育委員会学術文化財課　（財）山梨文化財研究所　河本工業株式会社　株式会社ＮＩＰＰＯコーポレーション　関東開発株式会社　有限会社アーバン店舗開発　株式会社峡東測量設計
10．発掘調査参加者（敬称略）
　荒木　昭彦　飯室　恵子　池谷富士子　磯村　美佳　久保田明義　小池　幹子　佐藤美喜男　高添美智子　中村　知保　波木井祥和　古屋袈裟男　松野　達夫　望月　典子

凡　　例

1．調査地点はかつて、「飯田一丁目遺跡」として調査された経緯があるが（『飯田一丁目遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 6 集 1985 年）、『甲府市遺跡地図』（平成 4 年）発行以後、「塩部遺跡」として周知している。
2．本書に掲載した遺構番号は、調査現場において付けたものである。
3．遺構名は各遺構の形状・検出状況に応じて調査現場において付けたものである。
4．全体図、遺構・遺物実測図の縮尺は図中に表示した通りである。
5．遺構断面図における水平数値は、海抜高度を示している。
6．報告書中の方位は磁北を示している。

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
挿図・表目次

第１章　調査概要

第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　試掘調査結果 …… 1
第３節　調査の方法と経過 …… 3

第２章　遺跡環境

第１節　立地と地理的環境 …… 4
第２節　歴史的環境 …… 6

第３章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址 …… 10
第２節　溝状遺構 …… 33
第３節　埋甕遺構 …… 37
第４節　土坑 …… 38
第５節　遺構外出土遺物 …… 38

第４章　まとめ …… 39

挿　図　目　次

図１　試掘地点及び「飯田一丁目遺跡」調査範囲 …… 2
図２　試掘坑２～３出土遺物 …… 2
図３　遺跡周辺の微地形分析図 …… 4
図４　遺跡の位置 …… 5
図５　塩部遺跡と周辺の遺跡 …… 7
図６　甲府市全図（大正１０年） …… 8
図７　塩部遺跡全体図 …… 9
図８　１号住実測図・遺物出土状況 ……11
図９　１号住出土遺物 ……12
図10　２号住出土遺物 ……12
図11　２号住実測図・遺物出土状況 ……13
図12　３号住実測図・遺物出土状況 ……15
図13　３号住カマド実測図 ……16
図14　３号住カマド遺物出土状況 ……17
図15　３号住出土遺物(１)……18
図16　３号住出土遺物(２)……19
図17　４号住出土遺物 ……20
図18　４号住実測図 ……20
図19　５号住遺物出土状況・カマド実測図 ……21
図20　５号住実測図・遺物出土状況 ……22
図21　５号住出土遺物 ……23
図22　６号住実測図・出土状況(１)……26
図23　６号住遺物出土状況(２)……27
図24　６号住出土遺物 ……28
図25　７号住実測図・遺物出土状況 ……29
図26　７号住出土遺物 ……30
図27　８号住実測図 ……32
図28　８号住出土遺物 ……32
図29　１号溝実測図 ……33
図30　１号溝出土遺物 ……34
図31　２号溝実測図 ……35
図32　２号溝出土遺物 ……36
図33　埋甕検出状況 ……37
図34　埋甕出土遺物 ……37
図35　土坑出土遺物 ……38
図36　土坑実測図 ……38
図37　遺構外出土遺物 ……38

図　版　目　次

図版１　１号住出土遺物、２号住出土遺物、３号住出土遺物 …… 43
図版２　３号住出土遺物、４号住出土遺物、５号住出土遺物 …… 44
図版３　５号住出土遺物、６号住出土遺物 …… 45
図版４　６号住出土遺物、７号住出土遺物、８号住出土遺物 …… 46
図版５　埋甕出土遺物、土坑出土遺物、遺構外出土遺物、試掘坑２出土遺物、試掘坑３出土遺物 …… 47

写真１　試掘状況(試掘坑１)…… 1
写真２　試掘状況(試掘坑３)…… 1
写真３　１号住遺物出土状況 ……10
写真４　２号住完掘状況 ……13
写真５　３号住完掘状況 ……14
写真６　カマド遺物出土状況 ……17
写真７　カマド調査状況 ……19
写真８　調査状況 ……19
写真９　４号住遺物出土状況 ……20
写真10　５号住完掘状況 ……24
写真11　遺物出土状況 ……24
写真12　調査状況 ……24
写真13　一括遺物出土状況 ……24
写真14　一括遺物出土状況 ……24
写真15　調査状況 ……24
写真16　６号住完掘状況 ……25
写真17　６号住遺物出土状況 ……27
写真18　一括遺物出土状況 ……27
写真19　調査状況 ……27
写真20　調査状況(２)……27
写真21　７号住完掘状況 ……30
写真22　土層堆積状況 ……30
写真23　８号住遺物出土状況 ……31
写真24　調査状況 ……31
写真25　１号溝土層堆積 ……33
写真26　１号溝出土遺物 ……34
写真27　２号溝完掘状況 ……35
写真28　調査状況 ……35
写真29　２号溝出土遺物 ……36
写真30　検出状況 ……37
写真31　土層堆積状況 ……38
写真32　調査状況 ……38

表　目　次

遺物観察表（１） …… 40
遺物観察表（２） …… 41
遺物観察表（３） …… 42

第１章　調査概要

第１節　調査に至る経緯

塩部遺跡包蔵地内において、文化財保護法に基づき平成20年８月19日付けで株式会社カワチ薬品代表取締役河内伸二より店舗建設に伴い埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これにより市教育委員会は、同年９月４日より試掘調査を実施し、開発予定地内で埋蔵文化財を確認した。調査結果を踏まえた９月９日、工事主体者・施工責任者・市教委の三者で協議を行い、予定されている工事計画では埋蔵文化財を破壊するため保存の措置が必要であること、設計変更等により保存措置を講じるよう要望するとともに、市教委に委託し記録保存を行う場合は、工事主体者に費用負担を求めることなどを説明した。その後数回の協議を経た９月25日、工事主体者と市教委で発掘調査及び報告書作成業務に関わる委託契約を締結し、開発に先立ち遺跡に重大な影響を与える範囲156㎡を対象に埋蔵文化財の記録保存を行い、地域の歴史を伝える資料として保存・活用することとした。

法的手続きは以下のとおりである。

平成20年９月26日　文化財保護法第99条第１項の規定に基づき埋蔵文化財発掘の報告を山梨県教育委員会教育長に提出する。

平成20年11月14日　遺失物法第13条の規定に基づき埋蔵物の発見届を甲府警察署長に提出する。

第２節　試掘調査結果（図１，２、図版５）

すでに昭和59年、山梨県教育委員会が開発に伴い対象地の北側約300㎡を発掘調査している。古墳時代を中心に縄文・弥生時代の遺物も出土し、住居址等の存在が推定されていた。当開発計画に際しても遺構・遺物の検出は十分予想されたため詳細な調査データを得る目的で試掘調査を実施した。当該地に幅２～３ｍの試掘坑を３ヶ所、延べ33ｍにわたり設定し、重機により表土を除去後、人力で精査・確認を行った。東側に設定した試掘坑１からは、旧建物建設に際しすでに掘削を受けたらしく遺構・遺物ともに確認できなかった。西側に設定した試掘坑２～３において、地表下１ｍから遺構・遺物の出土が確認でき、一括性の高い土器集中箇所なども確認した。こうした結果を踏まえ、駐車場として利用されていた西側に遺跡が残存し、依然として良好に埋蔵していると判断した。

写真１　試掘状況（試掘坑１）

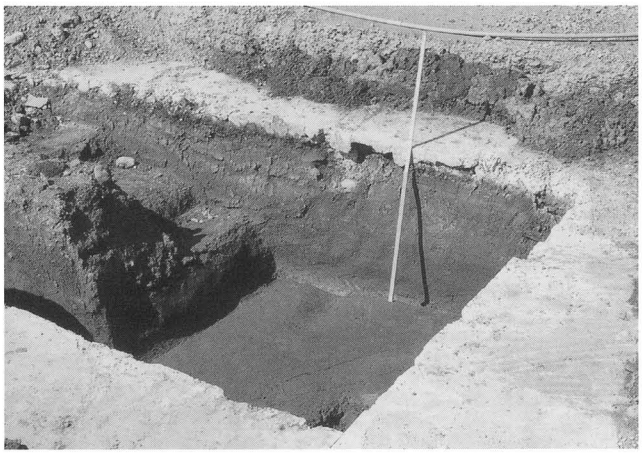
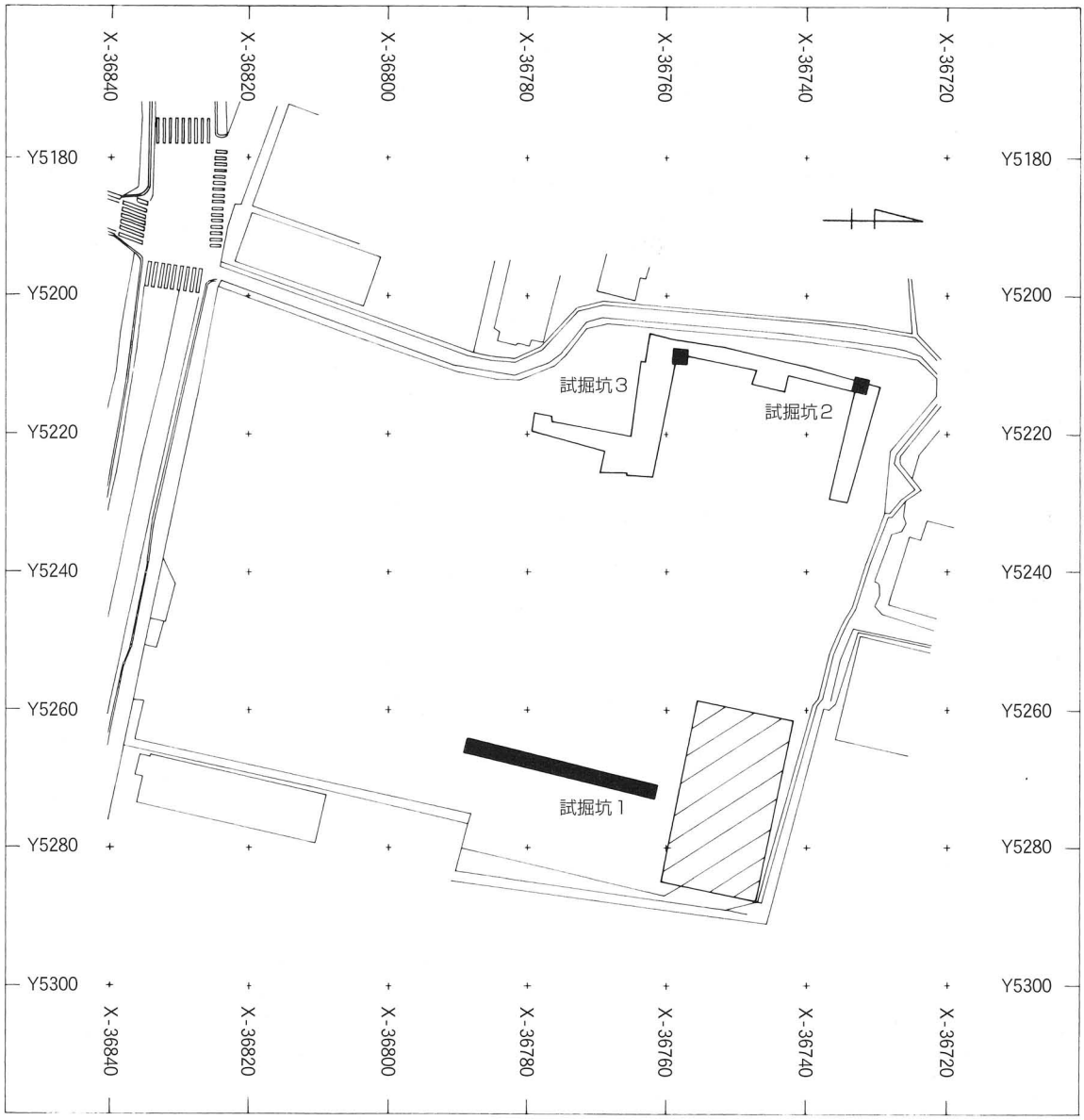


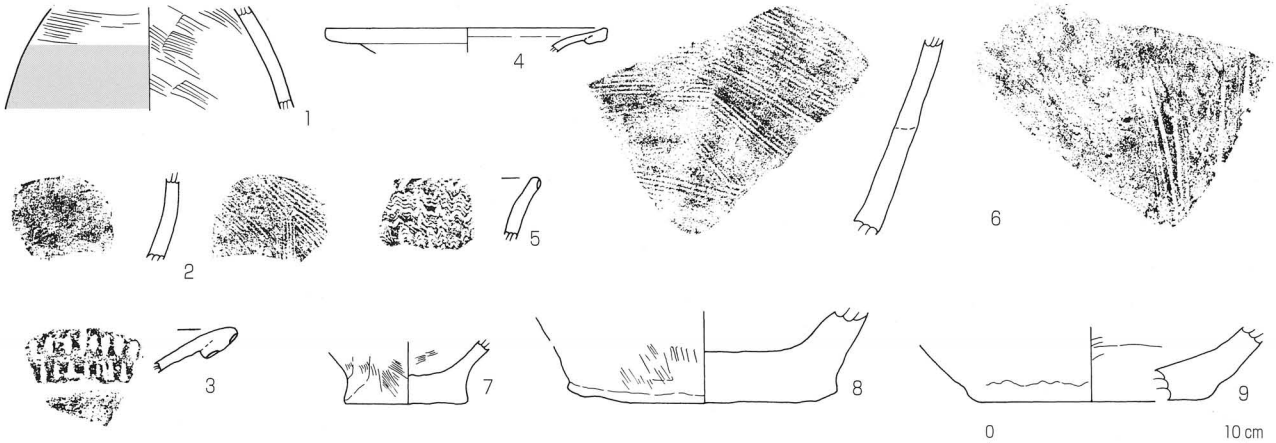
写真２　試掘状況（試掘坑３）



飯田一丁目遺跡調査範囲

0　4m

図１　試掘地点及び「飯田一丁目遺跡」調査範囲



0　10cm

図２　試掘坑２～３出土遺物

第３節　調査の方法と経過

調査は、平成20年９月26日から11月７日まで行った。調査範囲の表土等を重機で除去した後、人力にて遺構・遺物の検出に努めた。遺構検出に際し、規模・形状・重複の有無等を確認するため任意に半截・トレンチ調査により堆積土層を確認しつつ調査を行った。出土遺物に関し、遺構確認に先立ち出土した一括性が高いものについては原則として出土地点を記録しつつ調査を行ったが、それ以外は一括遺物として扱った。遺構に伴う出土遺物は一括性が高いもの、底面出土のものを記録し、それ以外は各遺構の一括遺物とした。調査・測量の基準として、国土座標に基づく基準点を設置し、遺構の記録は10分の１、もしくは20分の１で測量及び図面作成を行い、全体図は航空写真測量により作成した。記録写真は、遺物の出土状況、遺構の検出状況、土層の堆積状況などを主に撮影した。発掘調査終了後、引き続き整理作業を実施し、出土遺物の洗浄・注記、実測遺物の選定、図化・トレース作業を行った。報告書刊行まですべての業務が完了したのは平成21年３月であった。

＜調査日記抄録＞

９月26日（金）重機にて表土除去、27日まで。

９月29日（月）降雨のため機材搬入のみ実施。

９月30日（火）精査・遺構確認作業。部分的に撹乱の痕跡を確認する

10月１日（水）遺構確認作業。住居址３～４棟確認。土層の堆積状況を確認する

10月２日（木）遺構確認作業。新たに住居址を２棟確認する。トレンチ調査により遺構の重複関係を確認する。

10月３日（金）引き続きトレンチ調査により遺構の重複関係を確認する。１号住及びピット１の平面プランを写真撮影する。

10月６日（月）降雨のためポンプにて排水する。調査区内への崩落土を除去する

10月７日（火）排水路掘削、ポンプにて排水。崩落土の除去。精査・遺構確認作業。

10月８日（水）降雨のため雨水を排出する。重機にて排土の移動を行う。

10月９日（木）雨水排出。精査・遺構確認作業。１号溝を確認、掘り下げを行う。

10月10日（金）埋甕2基確認する。１号溝掘り下げ、湧水により断念。２号溝を確認する。

10月14日（火）排水路掘削、ポンプにて排水。

10月15日（水）精査・遺構確認作業。１号住、掘り下げ行う。

10月16日（木）１号住掘り下げ。７号住の平面プラン確認、掘り下げを行う。

10月17日（金）１号住遺物出土状況、写真撮影。２．３号住の平面プランを確認する。

10月18日（土）３号住掘り下げ。古墳時代後期の遺物が出土。７号住遺物出土状況、写真撮影。

10月20日（月）３号住カマドを半截、土層堆積を確認する。４号住掘り下げ。

10月21日（火）埋甕平面実測。５．６号住の重複関係を確認する。

10月22日（水）４～６号住掘り下げ。７号住遺物出土状況・土層堆積を記録する。

10月23日（木）24日まで降雨のため作業中止。

10月27日（月）５号住遺物出土状況実測。１号溝掘り下げを再開する。

10月28日（火）５号住遺物出土状況実測。６～７号住遺物出土状況、写真撮影。

10月29日（水）３号住カマド、遺物出土状況実測。4.6号住土層堆積を記録する。

10月30日（木）８号住を確認、被熱土が面的に広がる。２号溝確認、掘り下げ作業を実施。

10月31日（金）５．６号住出土遺物記録、取り上げを行う。

11月１日（土）５号住カマド、拡張して全面検出に努める。８号住・２号溝覆土を掘り下げる。

11月３日（月）８号住・２号溝、遺物出土状況実測。３号．５号住カマド平面図実測。

11月４日（火）５～６号住、記録図面を作成する。航空写真測量を実施する。

11月５日（水）出土遺物・機材の搬出を行う。重機にて埋め戻しを始める。（７日まで）

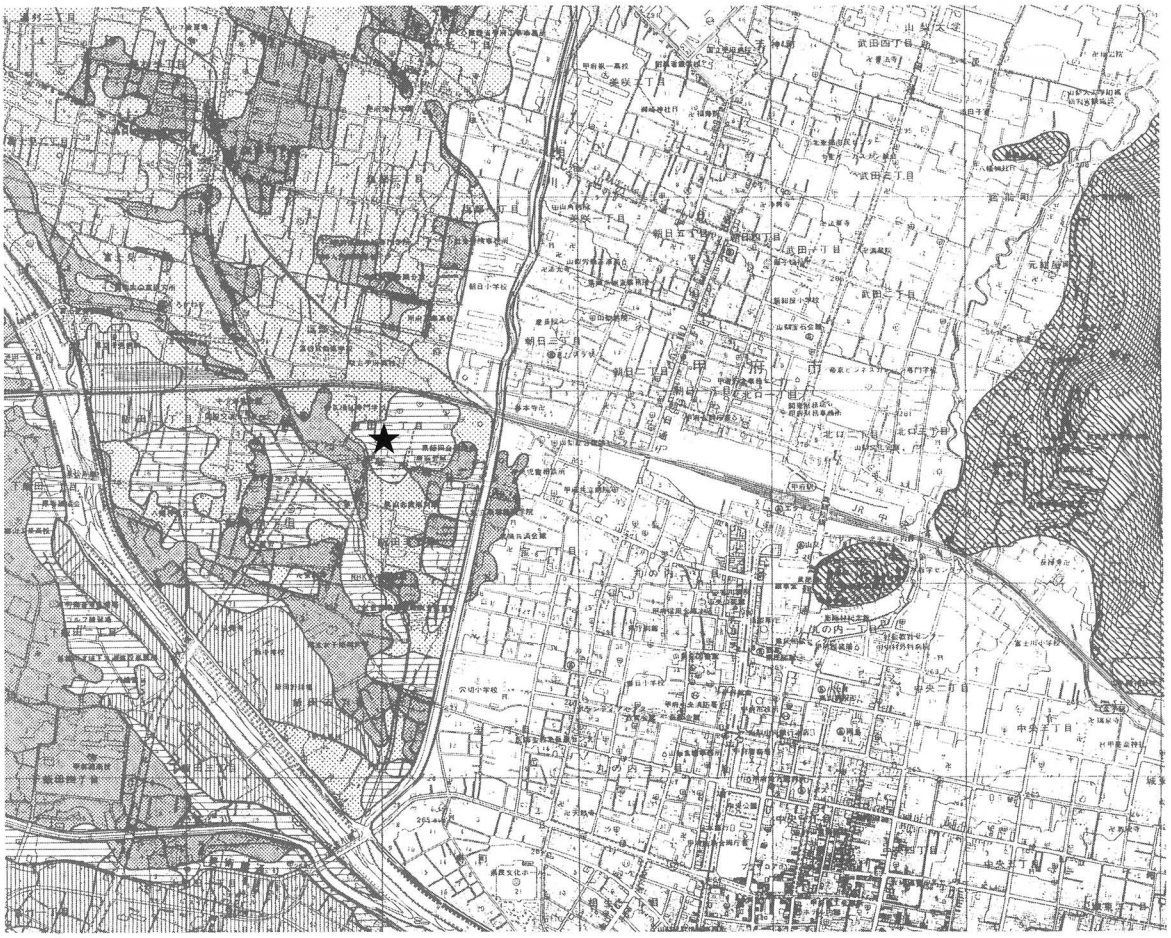
第2章　遺跡環境

第1節　立地と地理的環境（図 3,4）

本市は、山梨県のほぼ中央に位置し、南北に細長い市域をなしている。長野県との境、標高 2599 mを測る金峰山山頂から盆地底部の低平地、標高約 250 m地点まで幅広い自然を含み、市域の４分の３は山地であり、標高 300 m未満の低地が４分の１を占めている。本遺跡は甲府盆地の北縁部、相川によって形成された扇状地の扇端部に立地する。相川は、盆地西縁を南流し、荒川と合流した後、さらに盆地内を南流する。遺跡の北側背後に湯村山が迫り、南側前面に盆地低平地が広がる。

微地形分析から度重なる相川・荒川の流路変更により一帯には後背湿地・旧河道の他、自然堤防・扇状地等が埋没しており複雑な地形を形成していたことが判明している。こうした成果から観察すると、調査地点一帯は扇状地地形が張り出し住環境に適した高燥な地であったと推量できる。

調査地は市内飯田一丁目に所在し、標高約 275 mを測る。弥生時代から平安時代の遺跡として周知され、一帯は宅地化が進んでいる。



0　500　1000m

丘陵
扇状地Ⅰ
扇状地Ⅱ
自然堤防（高位面）
自然堤防（低位面）
後背湿地・旧河道

★＝塩部遺跡（調査地点）

図３　遺跡周辺の微地形分析図（『塩部遺跡』山梨埋蔵文化センター 1996 年より借載）

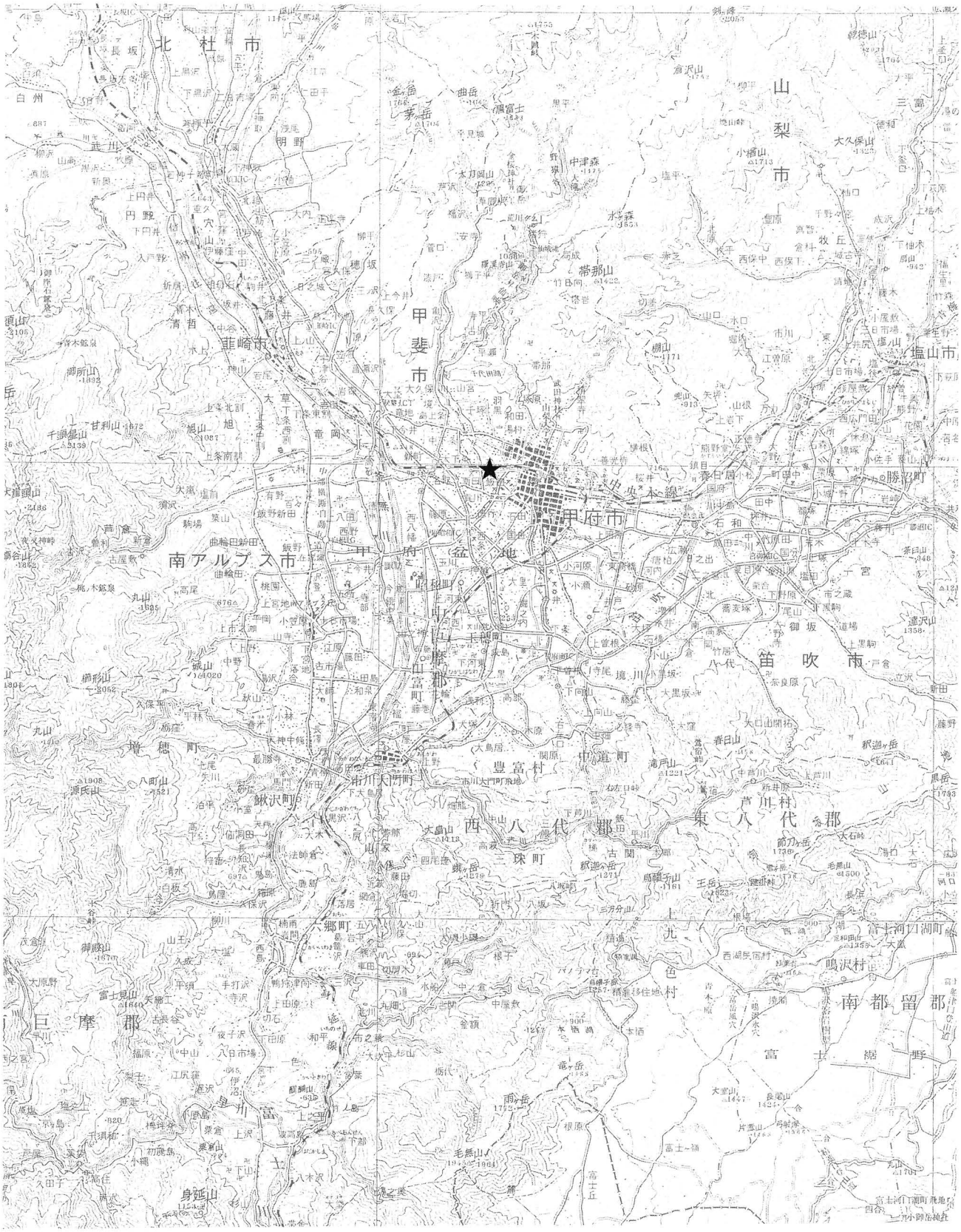

北杜市
山梨市
甲斐市
韮崎市
塩山市
甲府市
南アルプス市
笛吹市
豊富村
中道町
芦川村
東八代郡
西八代郡
三珠町
六郷町
鰍沢町
増穂町
巨摩郡
鳴沢村
南都留郡
富士裾野
0
20 km

図４　遺跡の位置

第２節　歴史的環境（図 5,6）

本遺跡は東西約 500 m、南北約 700 mの範囲に広がり、これまで種々開発にともない調査が実施されている。平成７年に実施した県立高校校舎建替工事に伴う調査では、弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓 11 基、弥生時代後期の住居址１棟、奈良・平安時代の住居址８棟のほか、水路・旧河道などを検出している。平成 13 年～ 16 年にかけて実施した道路改良工事に伴う調査では、弥生時代後期から古墳時代後期にわたり連綿と構築された住居址 45 棟、掘立柱建物跡 27 棟の他、古墳時代前期の方形周溝墓を４基発見している。これら遺構とともに多種多様な遺物や畿内・東海・北陸の各地域の影響を色濃く受けた土器が出土するなど各地から物資が集まる拠点的な集落であったと理解されている。

本遺跡以外にも相川・荒川の流路一帯には、多くの遺跡の存在が知られている。特に昭和 59 年、本遺跡から上流数ｋｍの相川河床においてナウマンゾウの臼歯化石が発見され、これにより後期旧石器前半まで遡って、人間の営みが推量できることとなる。

当地で人々の足跡が認められるのは縄文時代前期後半からである。榎田遺跡 (8)・緑ヶ丘一丁目遺跡 (35)・宝町遺跡 (45) から該期の土器・石器が検出され、上石田遺跡 (46) からは縄文中期の住居址を確認している。他に周知の遺跡として、金塚西遺跡 (10)・西大阪Ａ遺跡 (13)・音羽遺跡 (15)・西河原遺跡 (17)・緑ヶ丘二丁目遺跡 (34)・宮北遺跡 (47)・食料工場遺跡 (48) 等がある。

弥生時代後半以降、当地の居住・生産域、墓域などがそれぞれ明らかになりつつある。本遺跡のほか、榎田・音羽・青沼遺跡 (49) 等では平安時代まで連綿と続く集落跡が確認されており、本遺跡と榎田遺跡から古墳時代前期の方形周溝墓が、富士見遺跡 (21) からは同時期の水田跡がそれぞれ調査・確認され、平石遺跡 (18) より祭祀に関連すると推定される古墳時代後期の溝跡が発見されている。他に弥生～古墳時代にかかる遺跡は、天神北 (6)・天神西 (7)・跡部 (9)・神田 (12)・八幡東 (22)・三光寺山 (36)・向田Ａ遺跡 (38)・湯田町遺跡 (50)・伊勢町遺跡 (51) など多数存在する。

本遺跡から北方、荒川左岸は「千塚」の地名が示すように６世紀中頃から大規模な古墳群が築造されてきた地である。開発によりすでに多くが消滅したようであるが、湯村山山麓から山裾にかけて多数の古墳が現存する (23 ～ 30、32)。江戸期より知られた存在だった万寿森古墳 (25) は、初期横穴式石室を備え、県内有数の規模を有する。同様に江戸時代より大型墳墓として著名であった加牟那塚古墳 (11) は、直径約 45 m、高さ約７ｍを測り、東日本有数の規模を有する円墳であり、盆地西部を拠点とした有力首長の墳墓と推量されている。これらの他、穴塚古墳 (16) も荒川流域で現存する数少ない古墳の一つである。

奈良・平安時代の遺跡は、前述した榎田・音羽・青沼遺跡の他、秋山氏館跡 (52)・平石遺跡から建物跡が確認されている。周辺には若宮前 (3)・天神平 (4)・御蔵 (5)・西大阪Ｂ (14)・村之内 (37)・八幡東・永井 (39)・十二天 (40)・南河原Ａ～Ｄ (53 ～ 56)・村西遺跡 (57) など多くの包蔵地が知られている。古墳時代以来当地は、大型墳墓を築造し得る有力氏族が居住する拠点的地域であったと考えられている。

中世鎌倉期、稲積荘・志摩荘・小松荘・塩戸荘などが市域で確認できる。荘域・存続期間など不明確であるが、稲積荘は上石田から南方、盆地低平地が荘域となり、小笠原氏が在地領主と推定されている。志摩荘・小松荘は九条家領であり、武田有義が在地領主と推定されている。志摩荘の荘域は千塚・湯村・荒川以西に比定され、小松荘の荘域は小松から積翠寺にかけた相川中流域に比定される。

戦国期、湯村山山頂に武田氏館 (44) の防御の一翼を担った湯村山城 (31) が築造されるほか、館背後の山嶺に監視・軍事的機能を帯びた和田の城山 (1)、法泉寺山の烽火台 (33)、小松山の烽火台 (41)、鐘撞堂 (43) などの城砦群が構築されていた。

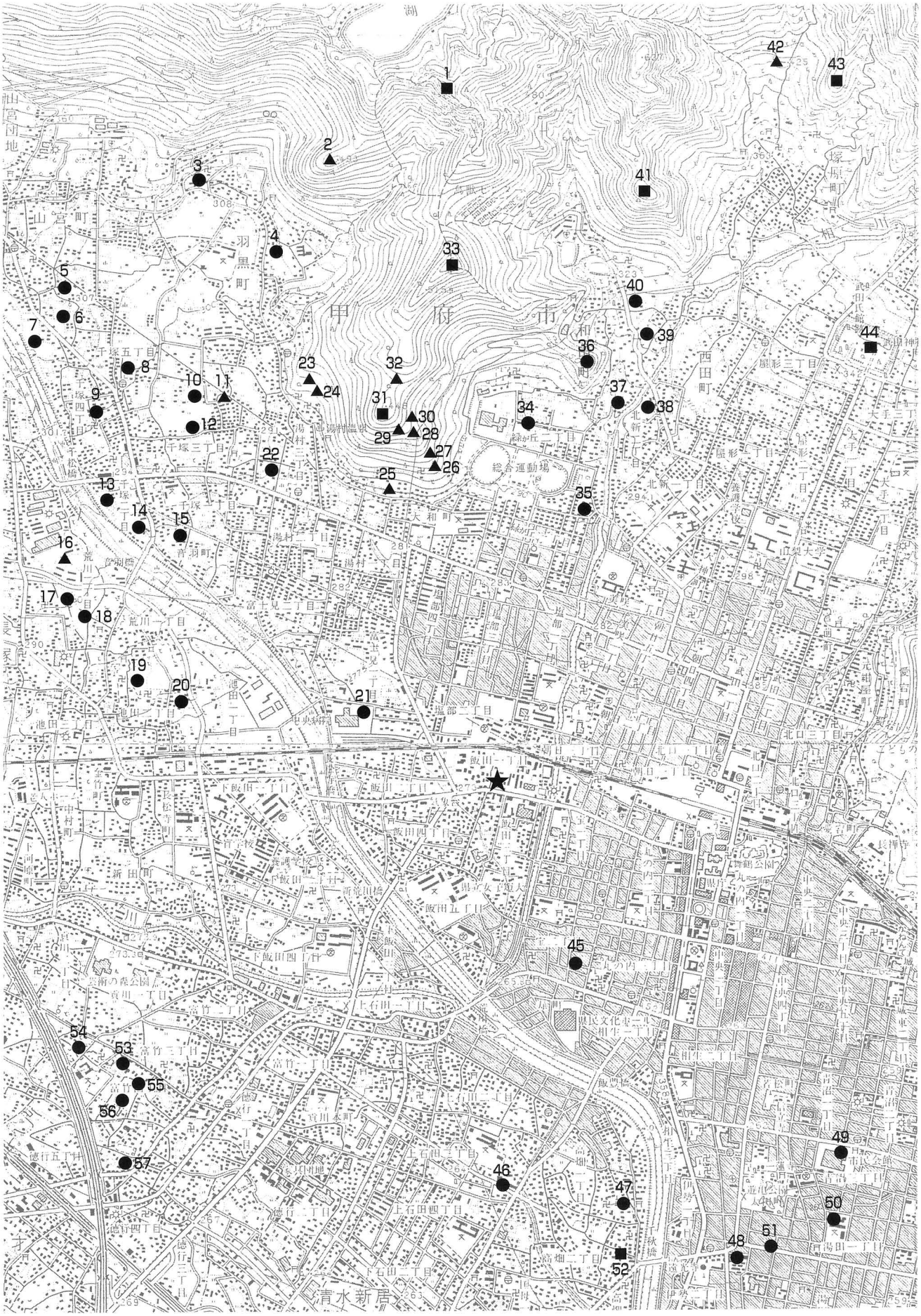


図５　塩部遺跡と周辺の遺跡（★塩部遺跡　●縄文～平安　▲古墳　■中世城館）

数少ない当該期の調査事例として、秋山氏館跡(52)がある。墓坑23基、荼毘状遺構2基のほか、区画溝・井戸跡・建物跡などを検出している。15世紀を通じ墓域であり、その後、近世の屋敷地へと変化していることが判明した。

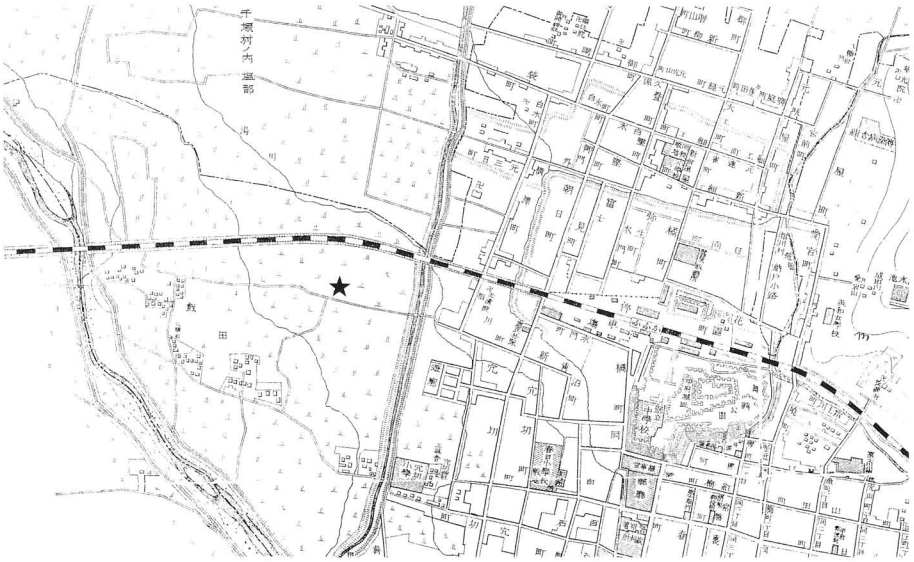


図6　甲府市全図（大正10年）

江戸時代、調査地一帯は塩部村に含まれたらしく、慶長6年（1601）「北山筋塩部之郷御縄打水帳」（『西山梨郡志』）では屋敷数19を数え、文化11年（1814）完成の『甲斐国志』は当村について、戸数20・人数67、高1049石余と記載する。調査地は江戸時代より人家も点在しない耕作地だったらしく大正10年(1921)発行の甲府市全図は相川以西を大きく耕作地と表現している。

本文中及び図5に示した遺跡の内訳は、以下のとおりである。

1．和田の城山（中世）
2．羽黒山古墳（古墳）
3．若宮前遺跡（平安）
4．天神平遺跡（平安）
5．御蔵遺跡（古墳・平安）
6．天神北遺跡（古墳・平安）
7．天神西遺跡（古墳時代）
8．榎田遺跡（縄文前期～平安）
9．跡部遺跡（古墳時代）
10．金塚西遺跡（縄文・古墳）
11．加牟那塚古墳（古墳）
12．神田遺跡（弥生～平安）
13．西大阪Ａ遺跡（縄文）
14．西大阪Ｂ遺跡（平安）
15．音羽遺跡（縄文～平安）
16．穴塚古墳（古墳）
17．西河原遺跡（縄文・平安）
18．平石遺跡（弥生～平安）
19．居村村上遺跡（縄文・平安）
20．前田遺跡（平安）
21．富士見遺跡（古墳～平安）
22．八幡東遺跡（弥生～古墳）
23．大平一号墳（古墳）
24．大平二号墳（古墳）
25．万寿森古墳（古墳）
26．湯村山一号墳（古墳）
27．湯村山二号墳（古墳）
28．湯村山三号墳（古墳）
29．湯村山四号墳（古墳）
30．湯村山五号墳（古墳）
31．湯村山城（中世）
32．湯村山六号墳（古墳）
33．法泉寺山の烽火台（中世）
34．緑ヶ丘二丁目遺跡（縄文前期～平安）
35．緑ヶ丘一丁目遺跡（縄文前期～平安）
36．三光寺山遺跡（古墳時代）
37．村之内遺跡（古墳～平安）
38．向田Ａ遺跡（弥生～古墳）
39．永井遺跡（古墳～平安）
40．十二天遺跡（平安）
41．小松山の烽火台（中世）
42．疣石古墳（古墳）
43．鐘撞堂（中世）
44．武田氏館跡（中世）
45．宝町遺跡（縄文・平安）
46．上石田遺跡（縄文中期）
47．宮北遺跡（縄文・平安）
48．食料工場遺跡（縄文～弥生）
49．青沼遺跡（古墳～平安）
50．湯田町遺跡（古墳時代）
51．伊勢町遺跡（古墳時代）
52．秋山氏館跡（平安～中世）
53．南河原Ａ遺跡（平安）
54．南河原Ｂ遺跡（平安）
55．南河原Ｃ遺跡（平安）
56．南河原Ｄ遺跡（平安）
57．村西遺跡（縄文・平安）

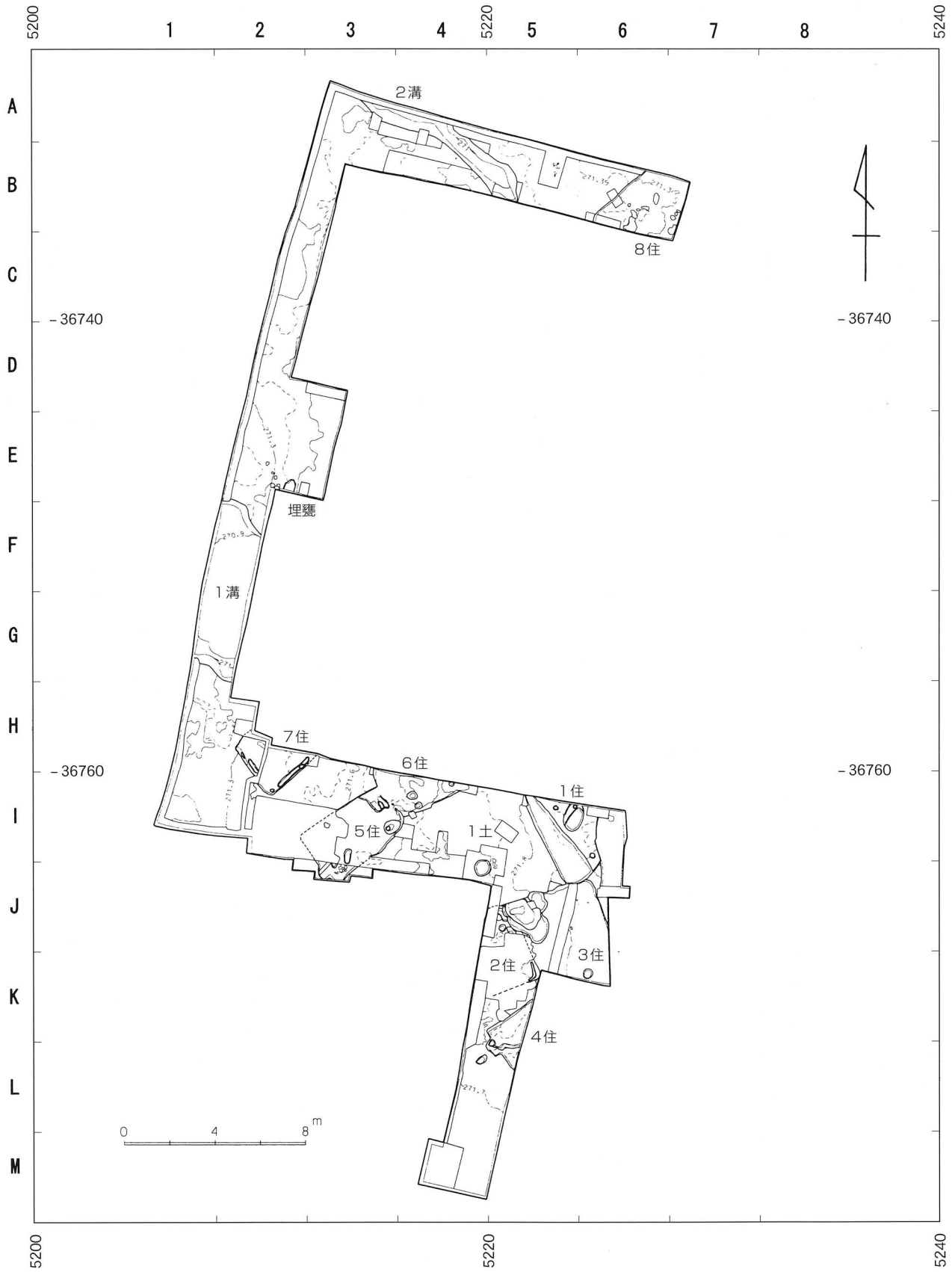

5200
1
2
3
4
5220
5
6
7
8
5240
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
-36740
-36760
2溝
8住
埋甕
1溝
7住
6住
1住
5住
1土
3住
2住
4住
0
4
8
m

図７　塩部遺跡全体図

第３章　遺構と遺物

遺物とともに竪穴住居址８棟、溝状遺構２条、埋甕２基、土坑１基を確認している。検出遺構・出土遺物の大部分が古墳時代後期に属す。

第１節　竪穴住居址

１号住居址（図 8,9、図版 1）

遺構確認作業に際し遺物集中と黒色土の広がりを検出し、トレンチを設定して遺構範囲及び掘り込みを確認した。遺構の大半は調査区外に広がりカマドも確認されず、東側は撹乱を受けている。古墳時代後期の住居址である。

（規模・形状）南北方向 4.62 m、東西方向 2.50 mを確認した。隅丸方形を呈し、掘り込みは、住居中央付近が 0.20 mと浅く、西壁にかけて 0.30 mとなり、住居隅にかけて掘り込みが深くなるようである。

（覆土）撹乱を受けているため判然としないが、３層からなり、床面近くに炭化粒が多く混入していた。

（遺物出土状況）遺構確認段階で数箇所に集中する状況であった。掘り下げに際し出土した点数は僅かで、単独かつ散在して検出される状況であった。

（内部施設）ピット３基及び西壁際を一段掘り込んだ周溝状の施設を確認した。ピット１は一部調査区外に広がるが、長径 1.20 m、短径 0.85 m、深さ 0.55 mを測る。一段テラス状に掘り残した後、長楕円形の掘り込みがある。ピット２は長径 0.26 m、短径 0.20 m、深さ 0.28 mを測る。ピット３は長径 0.25 m、短径 0.16 m、深さ 0.28 mを測る。ピット出土遺物は小片のみで図化できなかった。周溝状の施設は、幅 0.58 ～ 1.30 m、床面からの深さ 0.14 ～ 0.19 mとなり南壁にいたり幅広く、深くなっている。

（出土遺物）住居址周辺からの出土遺物を含め９点を図化した。７の時期が判然としないが、他は古墳時代後期の所産である。１は半球形を呈する坏、２は内湾口縁坏と呼ばれ丸底で口縁部との境に稜を有するもの、３～５，８はハケ整形される甕の破片、９は安山岩産の磨石であろうか、磨面が４面ある。

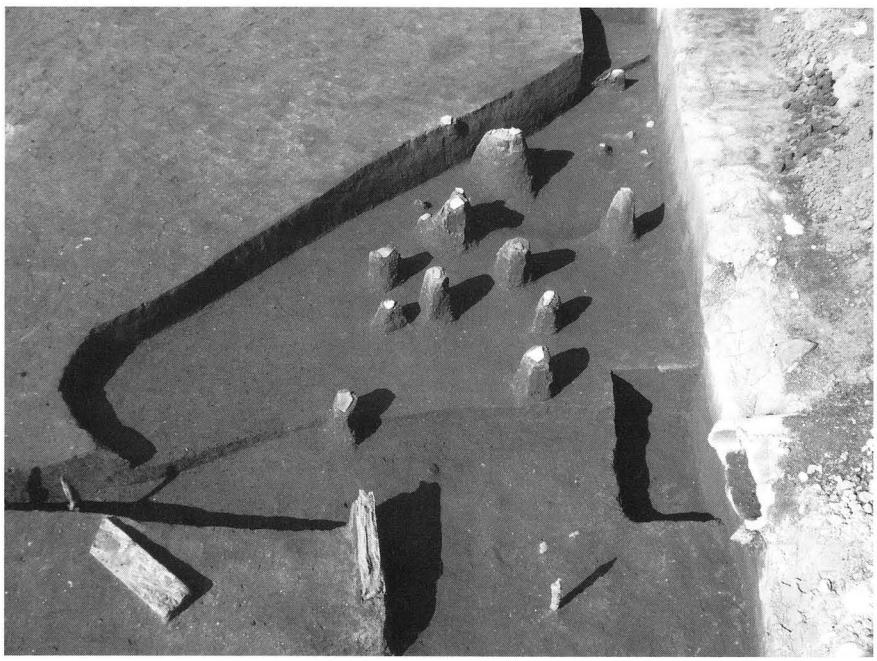
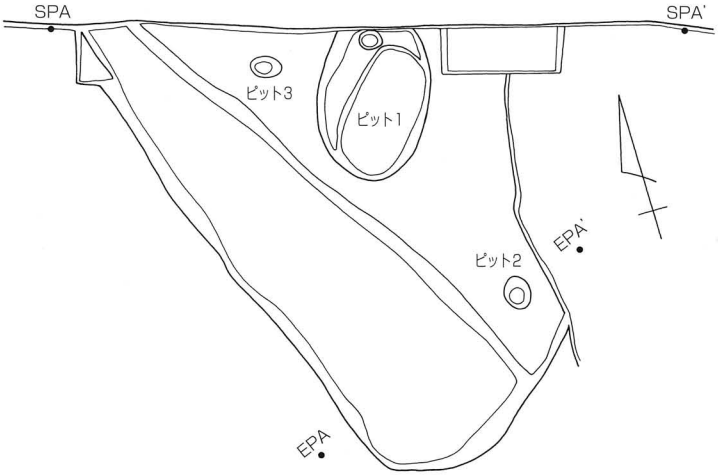
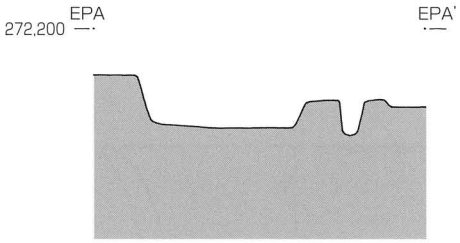
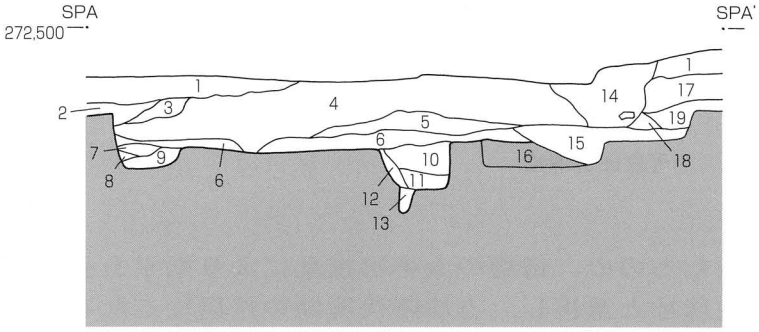


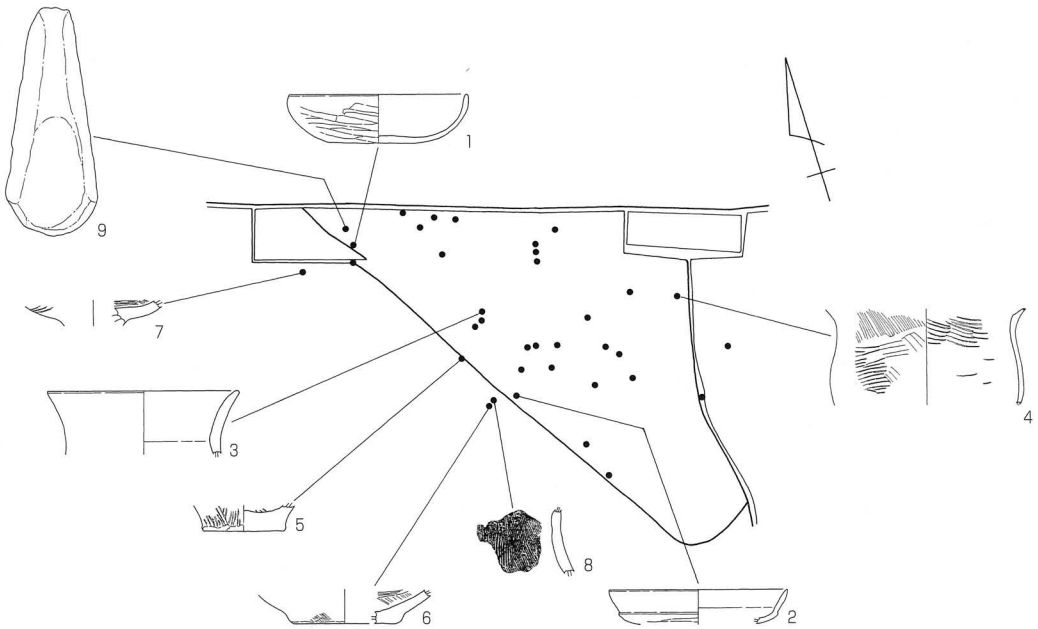
写真３　１号住遺物出土状況







1. 黄 色 土 層　砂粒を多く含む。灰色土・褐色土が混る。固くよくしまる。
2. 黄褐色土層　黄色土・灰色土が斑状に混る。固くよくしまる。
3. 褐 色 土 層　砂粒を含む。黄色土が混る。よくしまる。粘性あり。
4. 暗褐色土層　砂粒・小礫を多量に含み、焼土・炭化物が若干混る。固くよくしまり、粘性あり。
5. 黒褐色土層　砂粒・小礫を多く含み、炭化物が混る。しまり、粘性あり。
6. 暗褐色土層　砂粒・小礫を多く含む。炭化物が多量に混る。しまり、粘性あり。
7. 灰黒色土層　焼土・炭化物を含む。灰色粘質土が斑状に混る。粘性あり。
8. 灰褐色土層　焼土・炭化物を多く含み、粘性あり。
9. 灰黒色土層　黄色砂粒がブロック状に混る。粘性あり。
10. 茶褐色土層　砂粒・小礫を含む。焼土・炭化物が若干混る。
11. 黒褐色土層　炭化物が多量に混る。粘性あり。
12. 灰黒色土層　焼土・炭化物が僅かに混る。灰色砂粒がブロック状に混る。
13. 黒色粘質土層　焼土・炭化物が混る。粘性強い。
14. 撹 乱 層
15. 茶褐色土層　灰色砂粒を多量に含む。
16. 暗褐色土層　砂粒・小礫を多く含む。灰色粘質土がブロック状に混る。
17. 茶褐色土層　砂粒・小礫を多く含む。黄色土が粒状に混る。固くよくしまる。
18. 暗褐色土層　焼土・炭化物が混る。粘性強い。
19. 茶褐色土層　灰色砂粒が斑状に混る。固くよくしまる。



0　2 m

図８　１号住実測図・遺物出土状況

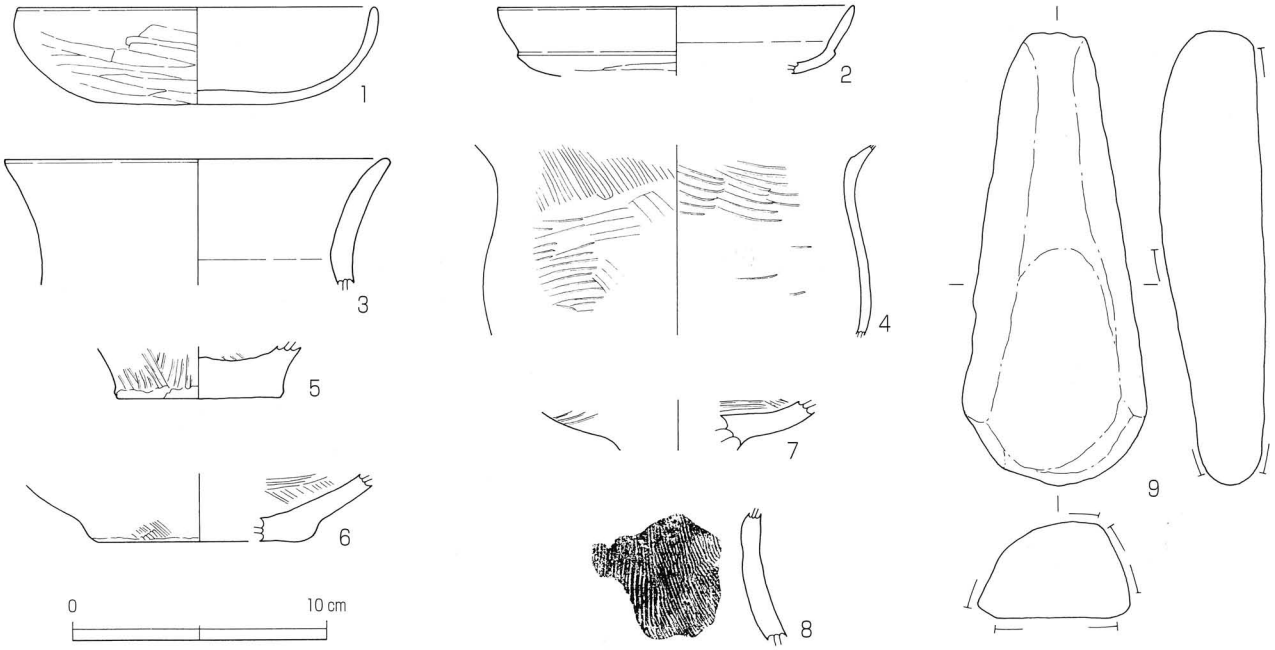


図９　１号住出土遺物

２号住居址（図 10,11、図版 2）

トレンチ調査により掘り込みを確認したものの、遺構の大半は撹乱により削平を受けたらしく多くを確認できなかった。３号住居址と重複し、古墳時代後期の住居址となる。

（規模・形状）東西方向 3.25 m、南北方向 3.59 mを確認した。隅丸方形を呈し、最も残りが良い箇所で 0.50 mの掘り込みがあった。

（覆土）撹乱により判然としないが、上層に黄褐色土が斑状に混入し、下層に焼土・炭化物を多く含むようだ。一部床面に焼土が集中する箇所があった。

（遺物出土状況）壁際から坏・高坏・甕が集中して検出された以外、破片資料が散在して検出される状況であった。

（内部施設）幅 0.18 m、深さ 0.08 m程の周溝を部分的に確認したのみである。

（出土遺物）１の丸底半球形を呈する坏は、内面黒色処理され、器面にタールが付着している。２は脚部の裾が大きく屈曲する高坏で、ヘラ削り、ナデによって仕上げている。３の鉢はハケ整形後、ナデ調整され、４は安山岩産の磨石であろうか、磨面が表裏２面ある。

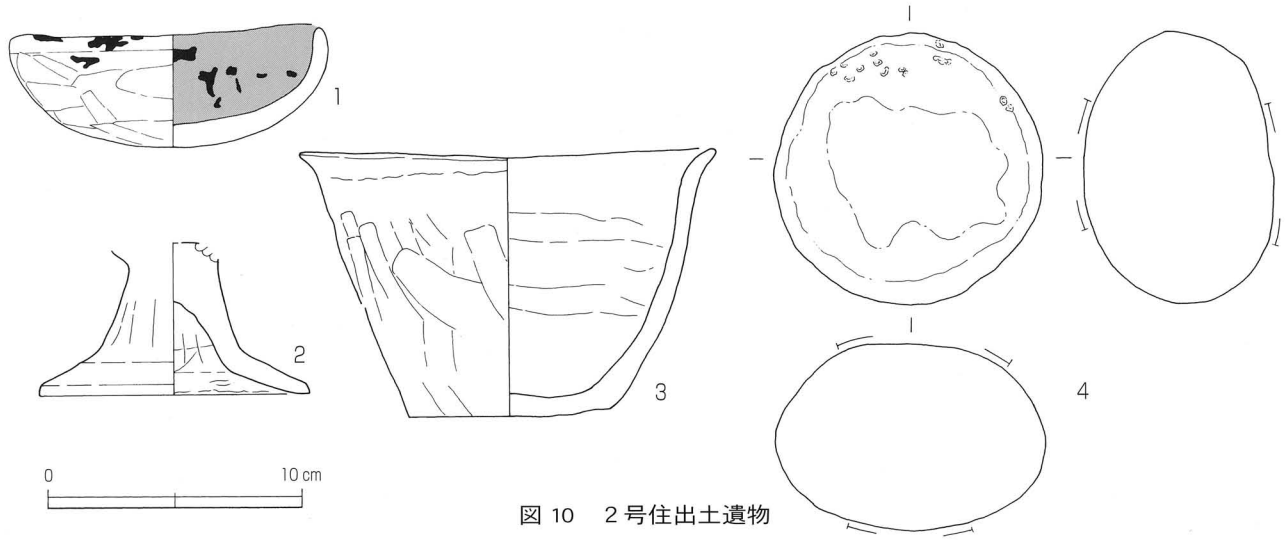


図 10　２号住出土遺物

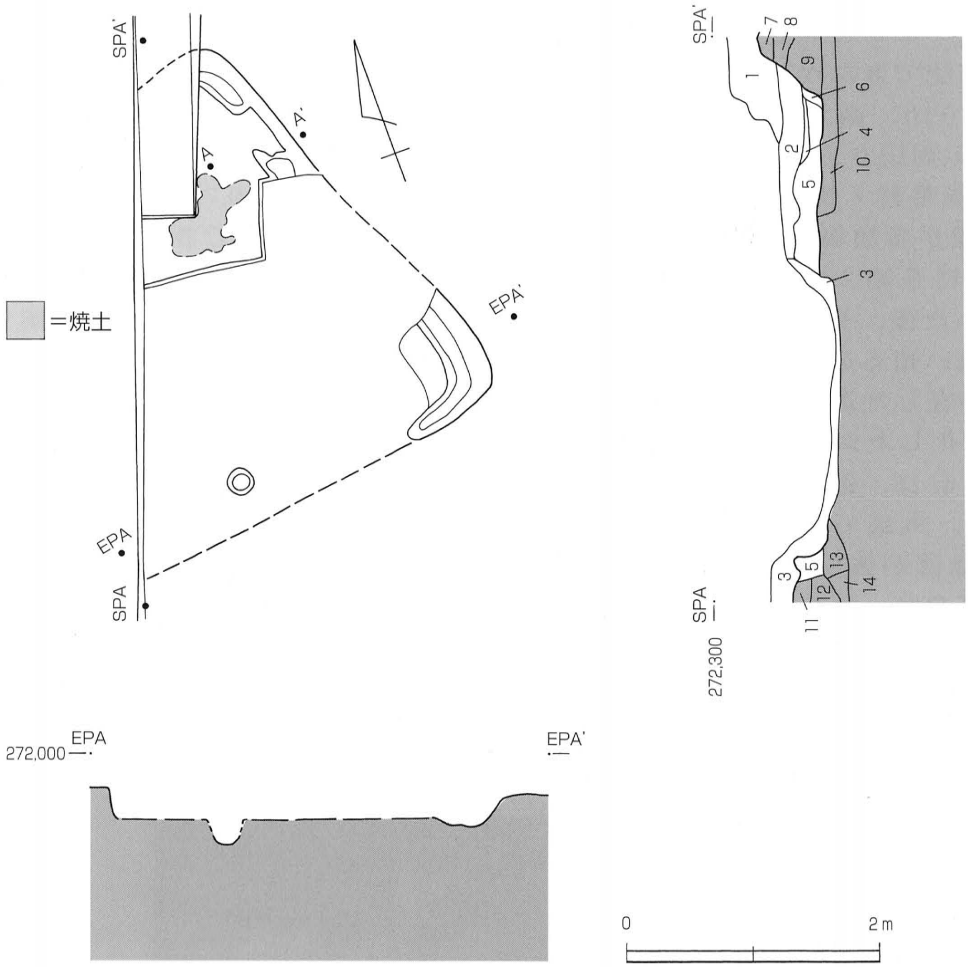


写真４　２号住完掘状況

図 11　２号住実測図・遺物出土状況

３号住居址（図 12 ～ 16、図版 1,2）

遺構確認に際し焼土の集中と黒色土の広がりを確認した。西壁は２号住及び撹乱により削平を受けたらしく確認できなかった。古墳時代後期の住居址である。

（規模・形状）東西 4.10 m、南北 4.60 mを確認し、隅丸方形を呈するようだ。

（遺物出土状況）カマド周辺から集中して出土した以外、破片資料が散在して検出された。

（カマド）掘り込みや構築材・焼土の広がりなどから長軸 1.02 m、短軸 0.71 m程の規模となる。径 10㎝程の小礫が多数集中していたが、袖石・支柱石などは確認できなかった。

（内部施設）カマド脇に長軸 2.11 m、短軸 1.57 m、深さ 0.15 m程の掘り込みがあり、一段テラス状に掘り残した後、長軸 1.62 m、短軸 1.05 m、深さ 0.57 mを測る楕円形の掘り込みがある。器形を窺い知る遺物が多く出土するものの、本住居に附属する施設でなく住居構築以前にすでに存在した遺構であろう。

（出土遺物）27 点を図化したが、前述したように本住居に伴わないものもここに含めて報告する。図 15 － 1 ～ 8, 15、図 16 － 26, 27 が本住居に伴う遺物である。1 は須恵器坏身の口縁部片、2 ～ 5 は、丸底で口縁部との境に稜を有し、内湾して立ち上がる坏、6 は須恵器坏身を模倣し口縁部が強く内折する坏となる。他に削りにより仕上げられた甕 (7)、内外面赤彩された高坏 (15)、磨石が 2 点 (26, 27) 出土している。

カマド脇の掘り込みからの出土遺物に坏・高坏・甑・甕・壺がある。坏は丸底で口縁部との境に稜を有し、直立して立ち上がるもの (9 ～ 12)、半球形を呈するもの (13)、内湾口縁坏 (14) がある。他に長胴形となる甕 (19 ～ 22)、胴部が球形となる壺 (23 ～ 25) がある。

写真５　３号住完掘状況

図 12　3 号住実測図・遺物出土状況

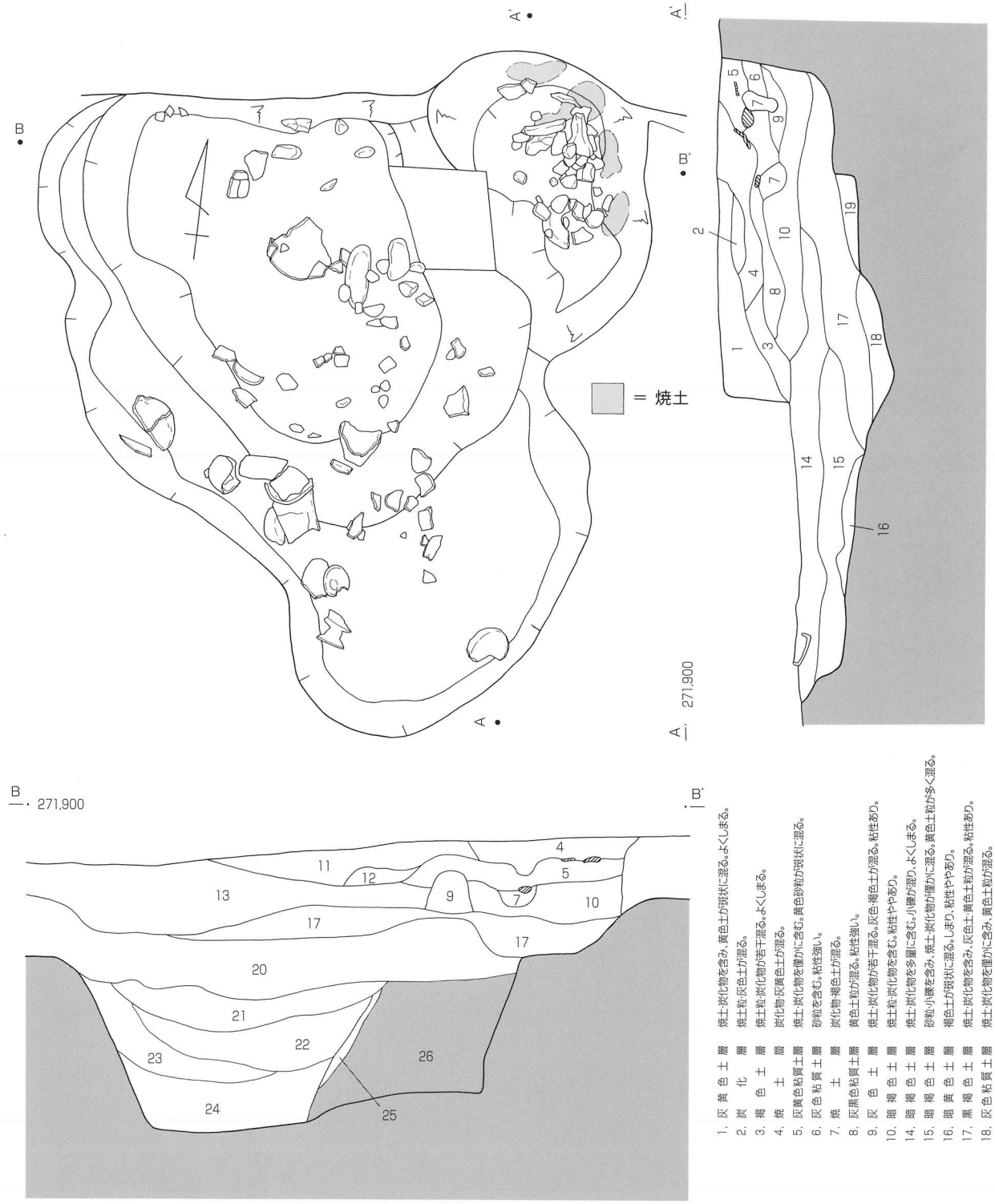


図 13　3号住カマド実測図

= 焼土

図 14　3号住カマド遺物出土状況

写真 6　カマド遺物出土状況

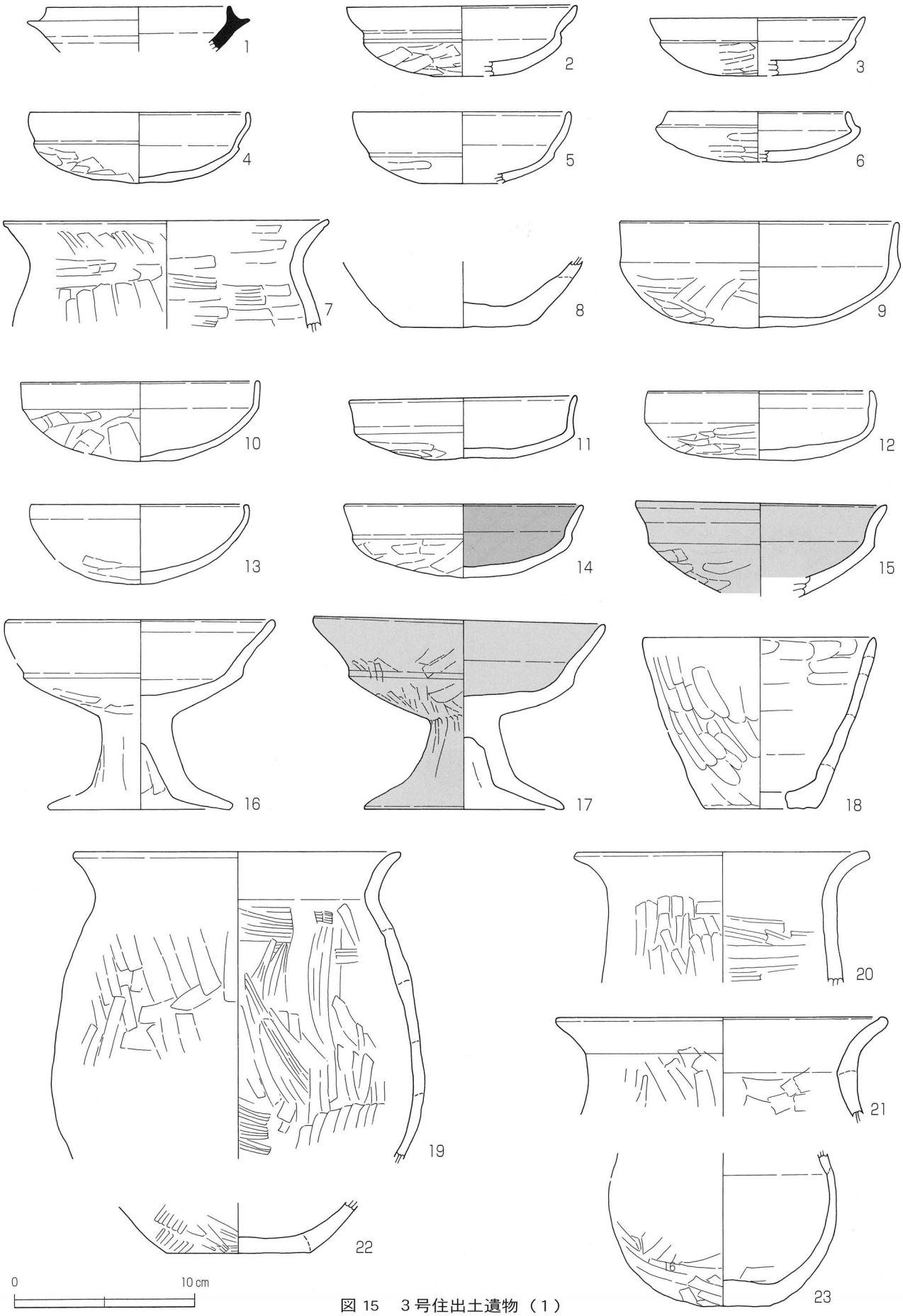


図 15　3 号住出土遺物（1）

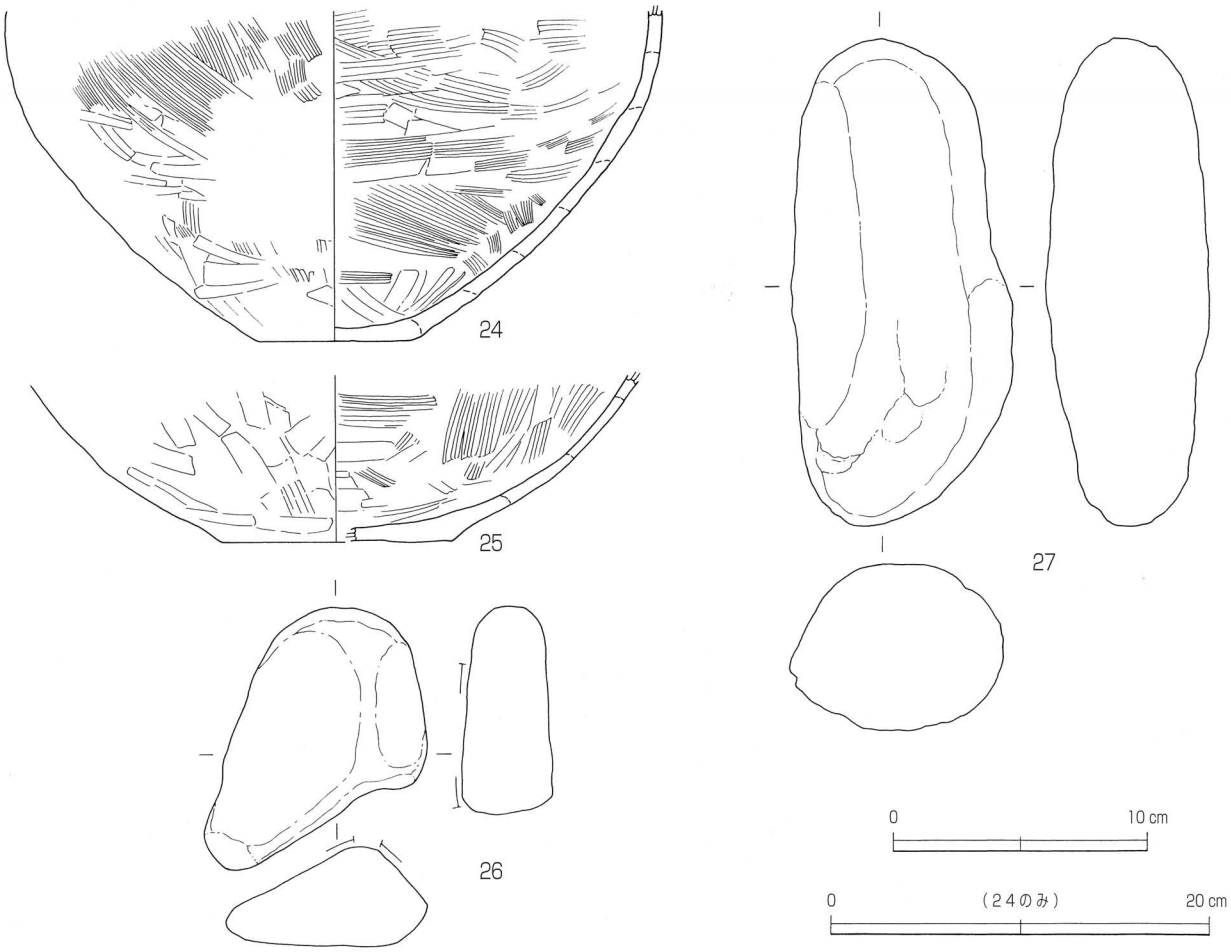


図 16　3号住出土遺物（2）

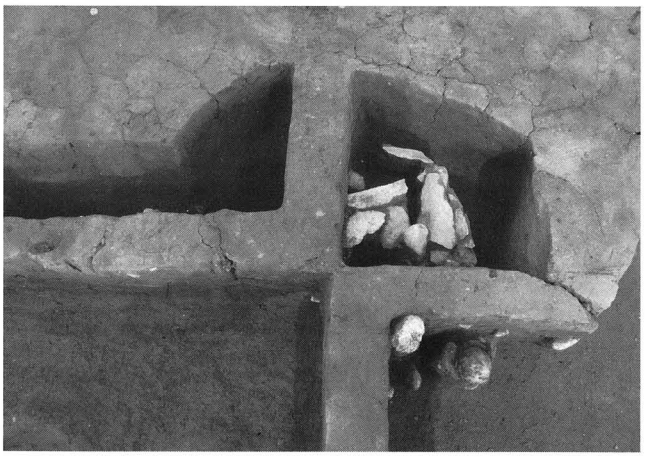


写真 7　カマド調査状況

写真 8　調査状況

４号住居址（図 17,18、図版 2）

遺構確認に際し黒色土の広がりを検出した。西壁から南壁を確認できたにすぎず、遺構の大半は調査区外に広がる。古墳時代後期の住居址であろう。

（規模・形状）南北方向 2.53 m、東西方向 2.20 mを測る。南壁に一部張り出しがみられるが略方形を呈する。

（覆土）レンズ状に埋没した過程が判明する。覆土全体に焼土・炭化物が混入するが、下層に多く混入する状況であった。

（遺物出土状況）細片資料が散在して出土した。

（内部施設）西側床面が低くなるらしく 15cm 程度の比高差がある。南壁張り出し部からピットを１箇所確認した。平面略円形を呈し、径 0.35 × 0.33 m、深さ 0.25 mを測る。

（出土遺物）２点を図化した。いずれもハケ整形された甕の底部片である。

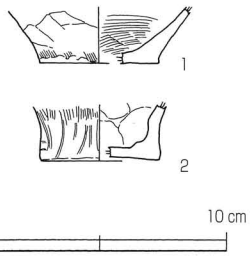


図 17　４号住出土遺物

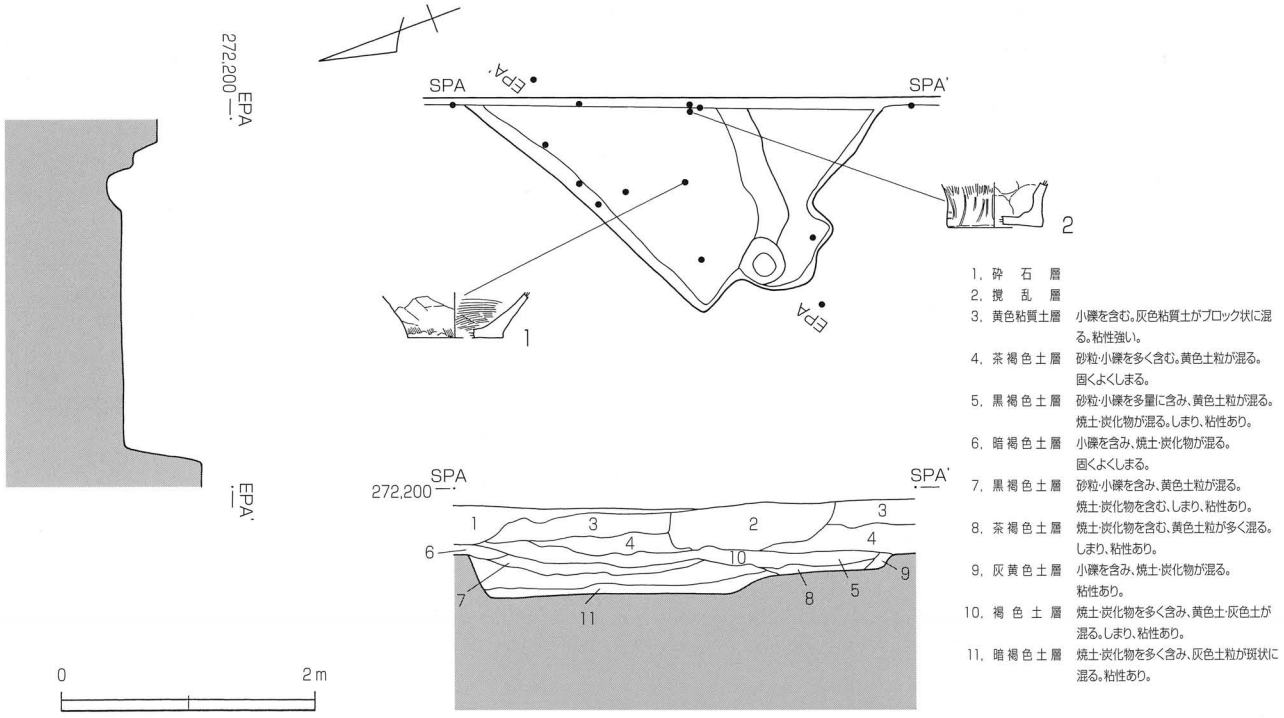


図 18　４号住実測図

写真９　４号住遺物出土状況

５号住居址（図 19 ～ 21、図版 2,3）

遺構確認に際し黒色土の広がりを検出し、トレンチを設定して遺構範囲及び掘り込みを確認した。一部撹乱を受け、６号住と重複している。古墳時代後期の住居址である。

（規模・形状）長軸 4.20 m、短軸 2.66 mを測り、方形を呈する。

（遺物出土状況）カマド周辺から数個体が一括集中して出土するとともに住居址全体から破片資料が多く検出された。

（カマド）住居南壁に焼土の広がりとともに張り出し部を検出した。撹乱を受け、袖石など確認できなかったが、焼土の広がりから長軸 0.86 m、短軸 0.68 m程の規模となろう。

（内部施設）ピットを２基確認した。ピット１は長楕円形を呈し、長径 0.63 m、短径 0.32 m、深さ 0.10 mを測る。ピット２は長径 0.78 m、短径 0.55 m、深さ 0.42 mを測る。

（出土遺物）１は須恵器坏身を模倣し口縁部が強く内折する坏、２は丸底で口縁部との境に稜を有し、内湾して立ち上がる坏である。甕は多くが長胴形となるもので、口縁部の屈曲が強く、最大径が胴中位にあるもの (3)、胴下位に最大径があるもの (4)、口縁部が直立し、屈曲が見られないもの (9) などがある。他に胴部が球形となる壺 (10)、混入品である古墳時代初頭の器台 (11) があった。

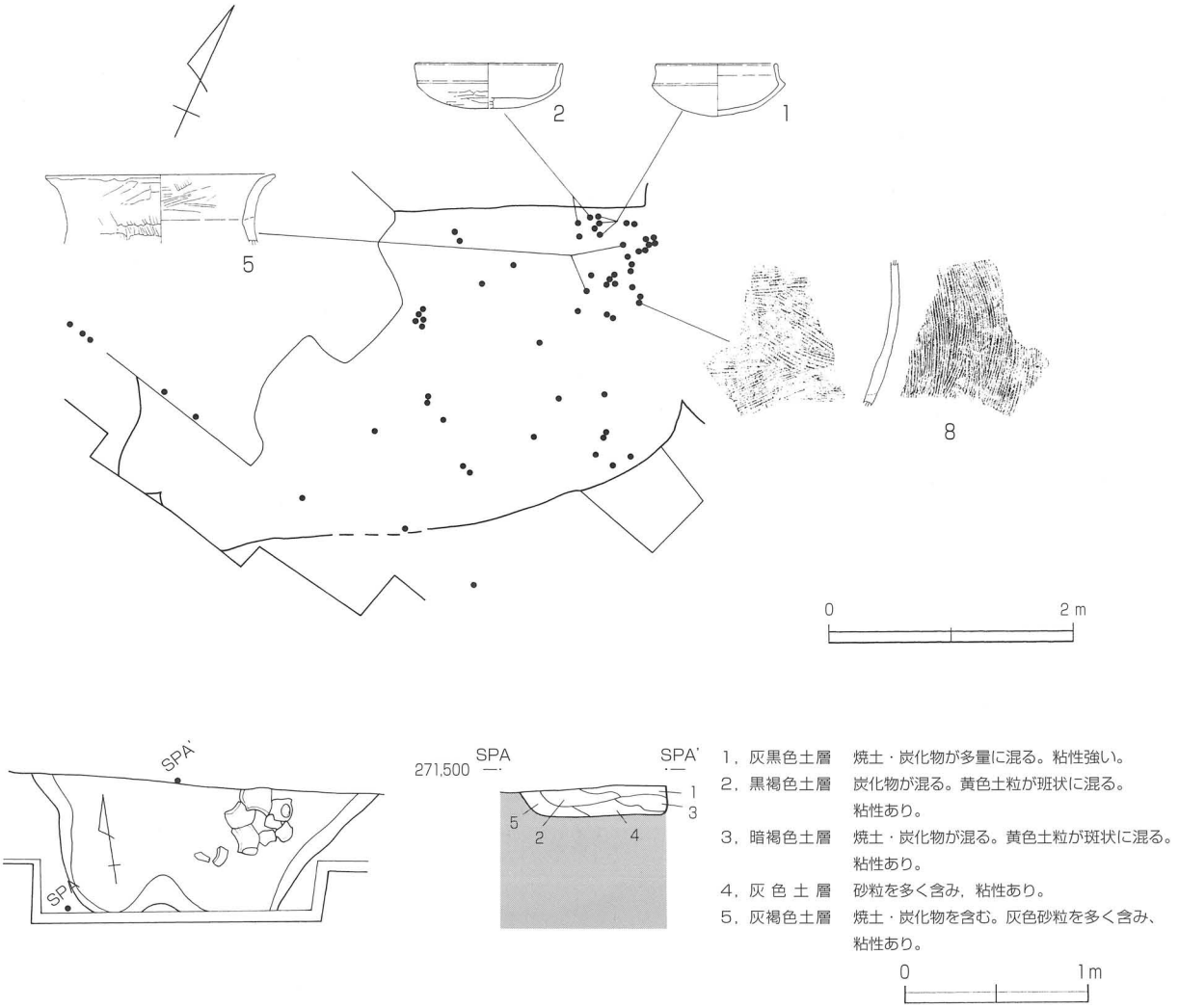


図 19　５号住遺物出土状況・カマド実測図

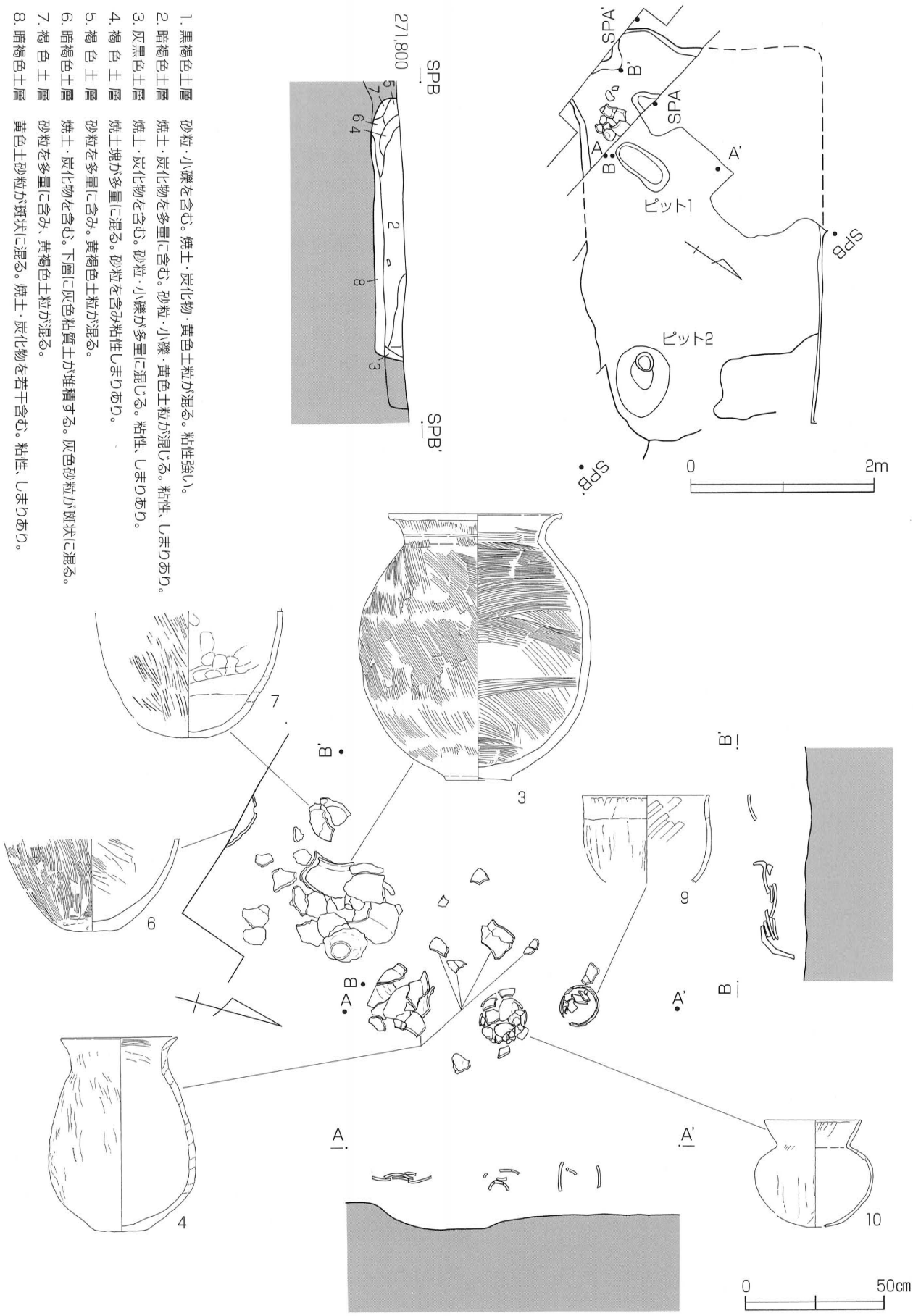


図 20　5 号住実測図・遺物出土状況

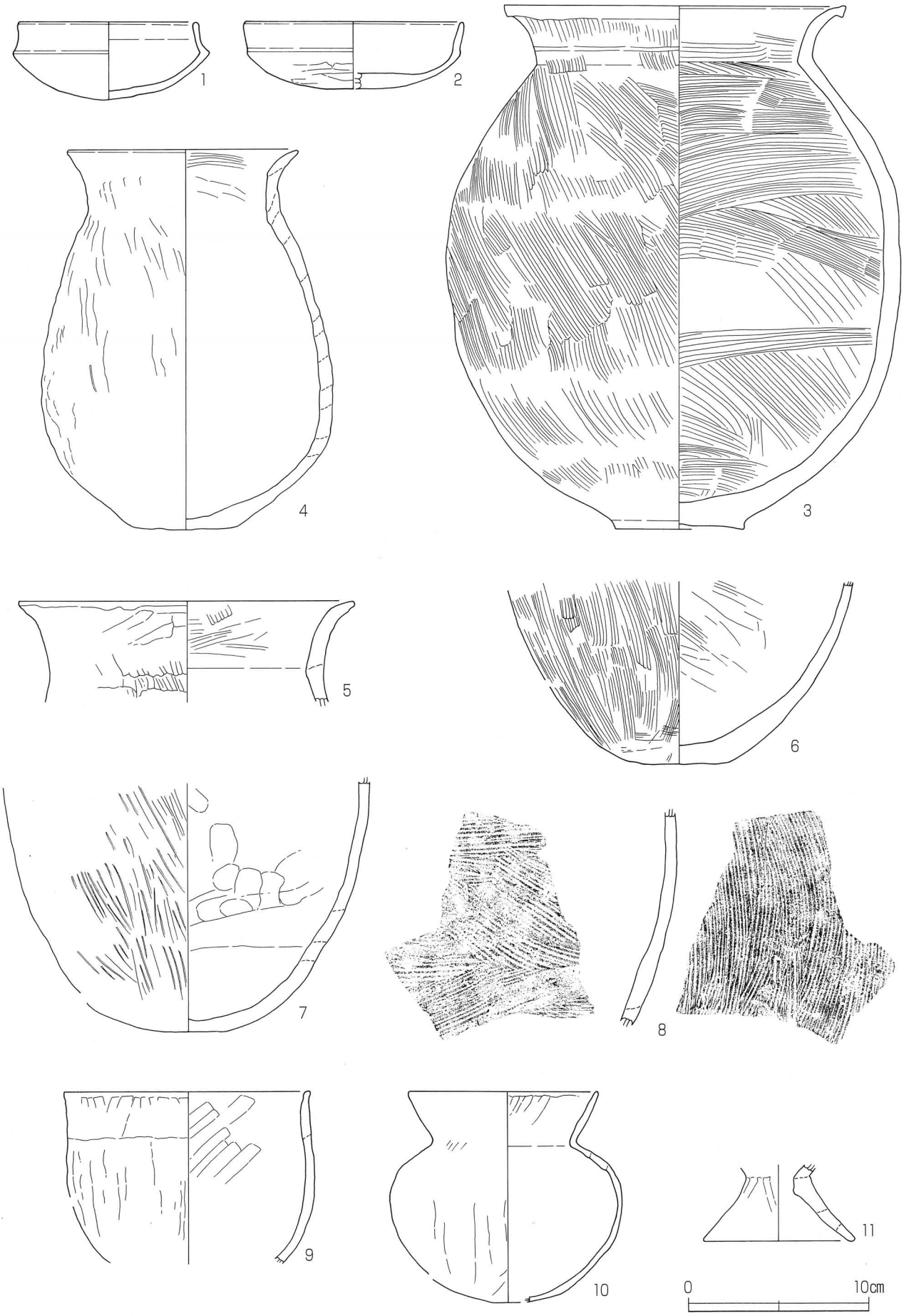


図 21　5 号住出土遺物

写真 10　5 号住完掘状況

写真 11　遺物出土状況

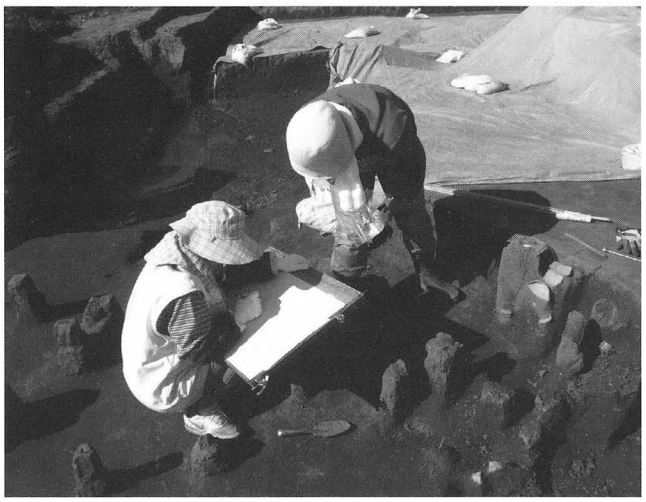


写真 12　調査状況

写真 13　一括遺物出土状況

写真 14　一括遺物出土状況

写真 15　調査状況

6号住居址（図22～24、図版3,4）

遺構確認に際し黒色土の広がりを検出し、トレンチ調査により遺構範囲及び掘り込みを確認した。遺構の大半は調査区外に広がり、5号住と重複する。古墳時代後期の住居址である。

（規模・形状）東西3.08 m、南北2.52 mを検出したのみで、隅丸方形を呈するだろう。

（覆土）覆土全体に焼土・炭化物が多く混入し、下層に炭化材が多く混入していた。

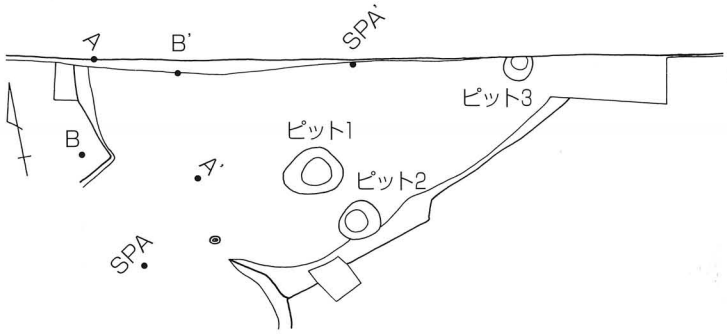
（遺物出土状況）住居址全体から多くの資料が得られた。西壁際から焼土・炭化材とともに数個体が集中して出土している。カマドの支柱も抜き取られ、カマド廃棄に伴う一括遺物と考えられよう。

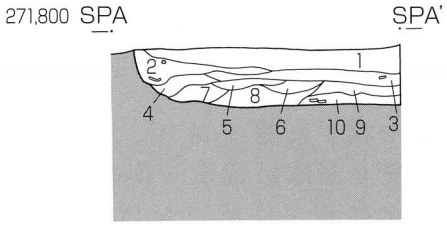
（カマド）5号住と重複するとともに、袖石なども確認できず規模など判然としないが、焼土層が堆積していたため西壁に設けていたと推定した。

（内部施設）ピットを3基確認した。ピット1は略円形を呈し、長径0.45 m、短径0.37 m、深さ0.26 mを測る。南壁際より検出したピット2は長径0.33 m、短径0.30 m、深さ0.31 mを測る。一部を確認したピット3は南北方向0.21 m、東西方向0.24 m、深さ0.13 mを測る。

（出土遺物）坏・甕・壺・甑・土製品などがある。坏は口縁部との境に稜を有し、内湾して立ち上がるもの(1)、丸底で半球形を呈するもの(2)がある。甕・壺ともハケ・ナデにより器面整形されている。9の甑は、4の甕と入れ子状となり検出されている。10の土製品はカマドの支柱となろう。被熱による磨耗が著しい。

写真16　6号住完掘状況





1. 褐　色　土　層　砂粒・小礫を多く含み、焼土・炭化物が混る。固くよくしまる。
2. 暗 褐 色 土 層　焼土塊が多く混り、砂粒・黄色土粒を含む。しまり粘性あり。
3. 暗 褐 色 土 層　焼土・炭化物を多量に含み、黄色土・灰色土粒が斑状に混る。
4. 灰　色　土　層　焼土・炭化物を含み、砂粒が混る。しまり、粘性あり。
5. 焼　　土
6. 灰　色　土　層　焼土塊を多く含む。粘性強い。
7. 灰　色　土　層　焼土粒・炭化物を多く含む。粘性強い。
8. 灰褐色砂質土層　焼土・炭化物を含み、灰色粘質土が斑状に混る。
9. 灰 褐 色 土 層　焼土・炭化物を含み、黄色土粒が斑状に混る。粘性ややあり。
10. 灰 黒 色 土 層　炭化物を多量に含み、灰色砂粒が斑状に混る。粘性あり。

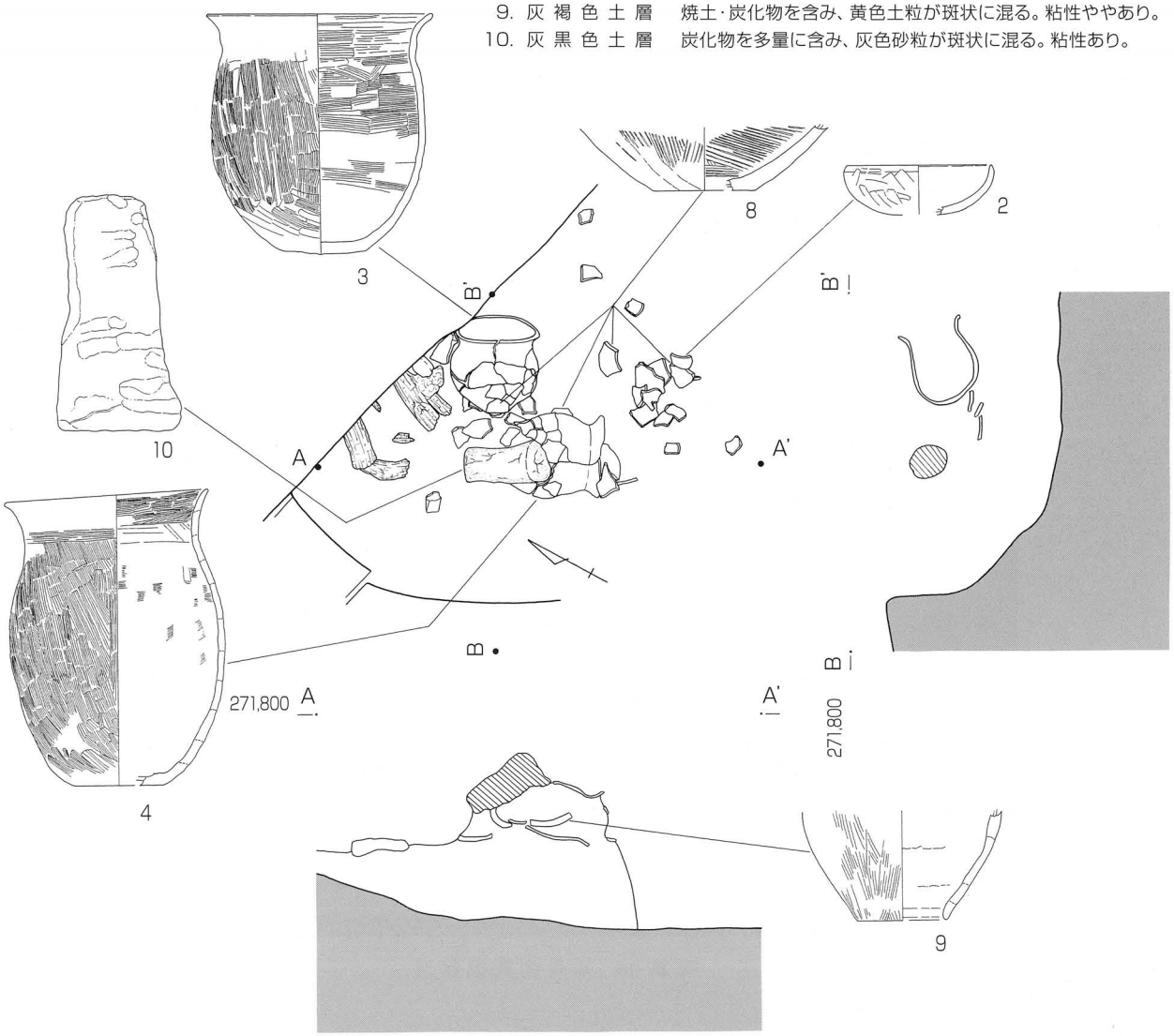


図 22　6 号住実測図・出土状況（1）

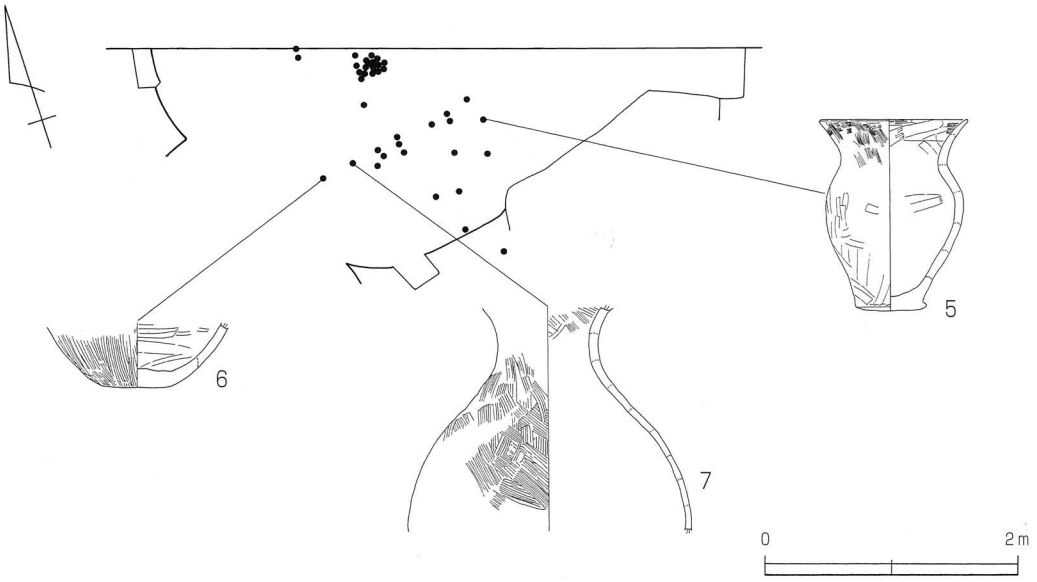


図 23　6 号住遺物出土状況（2）

写真 17　6 号住遺物出土状況

写真 18　一括遺物出土状況

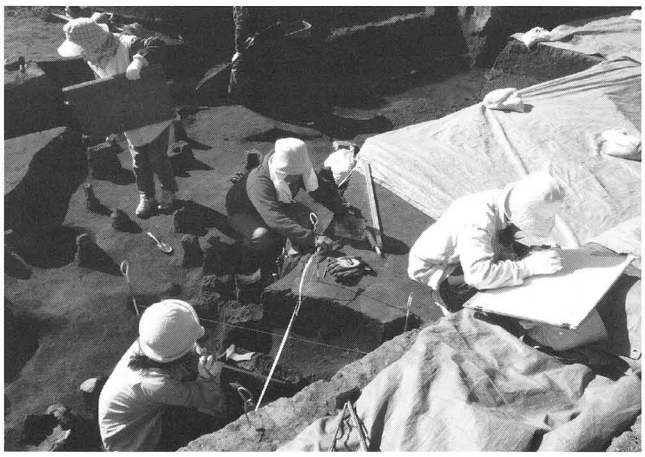


写真 19　調査状況

写真 20　調査状況 (2)

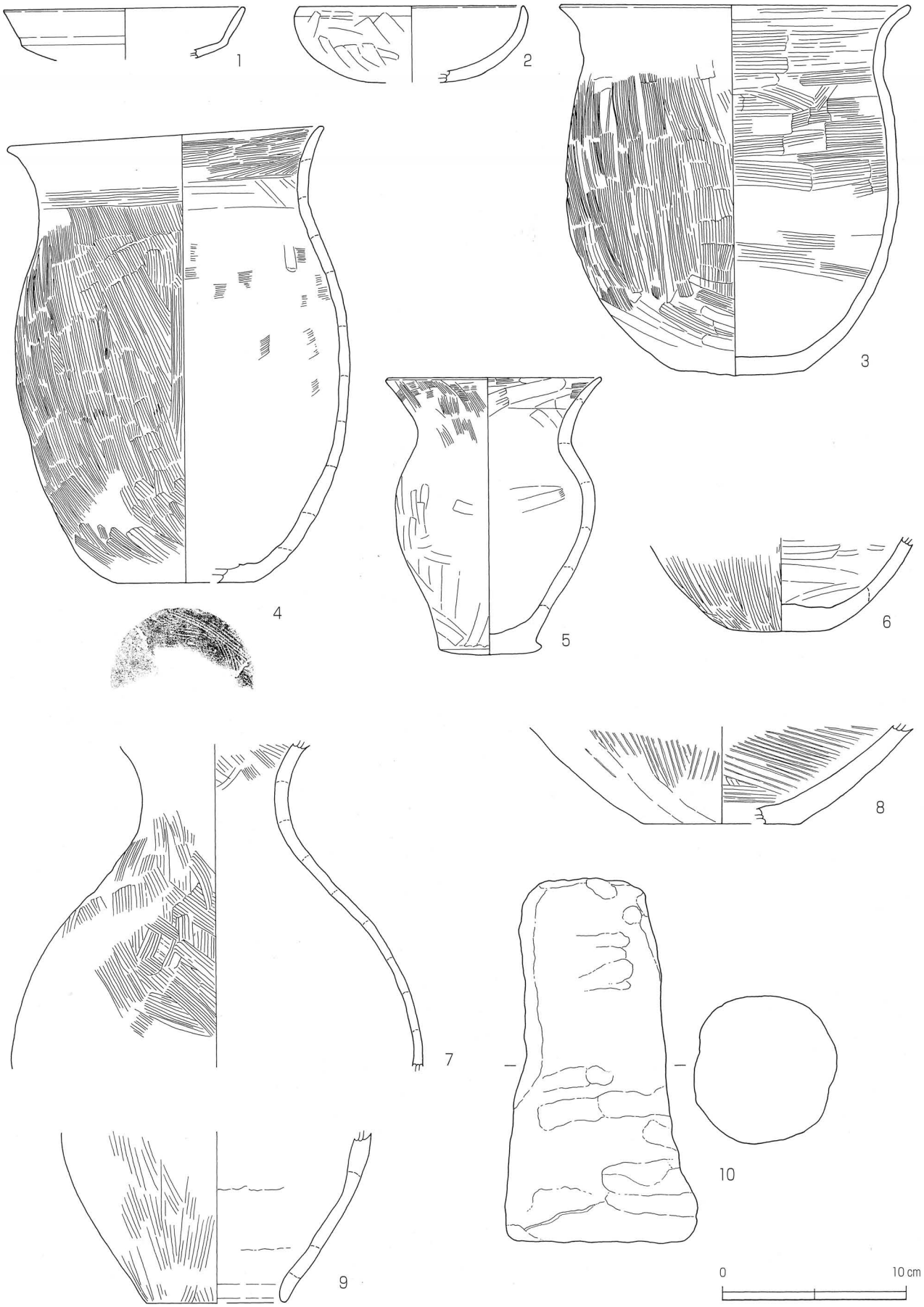


図 24　6 号住出土遺物

7号住居址（図 25,26、図版 4）

すでに試掘で確認していたため平面プランの検出に努めた。遺構の大半は調査区外に広がる。弥生時代後期の住居址である。

（規模・形状）南北方向 2.70 m、東西方向 2.68 m程を検出し、方形を呈するであろう。

（覆土）覆土全体に焼土・炭化物が混入するが、下層に炭化物が多く堆積していた。

（遺物出土状況）掘り下げに際し覆土中より出土した点数は少なく、散在して検出される状況であった。

（内部施設）幅 0.12 ～ 0.21 m、深さ 0.08 mほどの周溝を確認したのみである。

（出土遺物）壺・甕のみ８点を図化した。壺は口縁部に４個１単位の貼付文が４ヶ所に付き、内外赤彩されるもの (1)、有段口縁で棒状浮文が付くもの (2)、口縁部が波状を呈し、口唇部に刻み目が付くもの (3)、口縁部が大きくラッパ状に開き内外赤彩されたもの (4) がある。甕は、口縁部が「く」の字に屈曲し、口唇部に刻み目をつけ、ハケ整形されるもの (6)、口縁部から頸部にかけ櫛描波状文が施されるもの (5, 7) などがある。

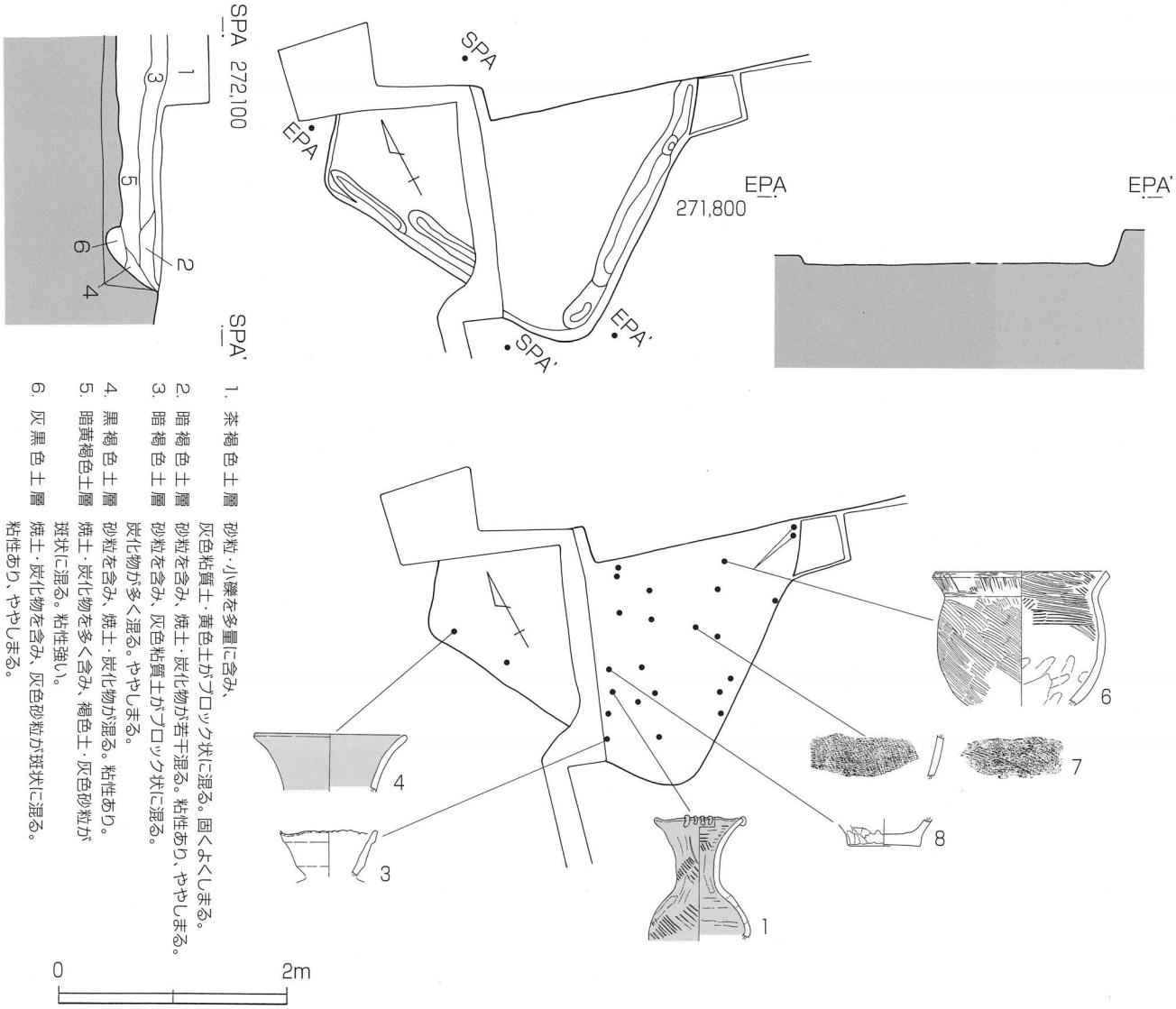


図 25　7号住実測図・遺物出土状況

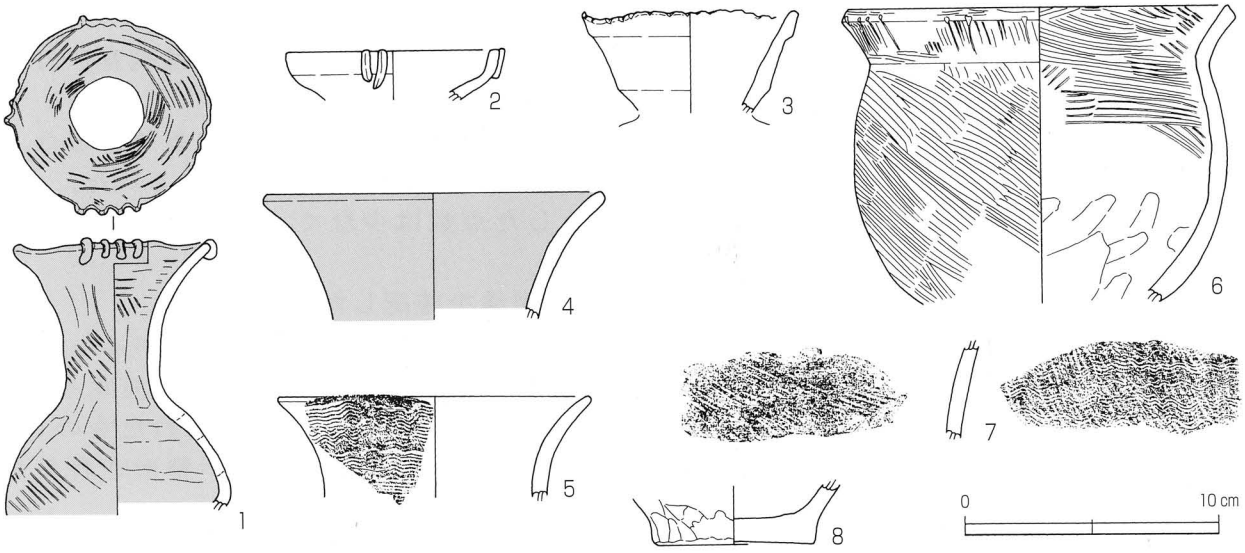


図 26　7 号住出土遺物

写真 21
7 号住完掘状況

写真 22
土層堆積状況

８号住居址（図 27,28、図版 4）

遺構確認に際し黒色土の広がりを検出し、トレンチ調査により遺構範囲及び掘り込みを確認した。遺構の大半は調査区外に広がる。古墳時代後期の住居址である。

（規模・形状）長軸 4.33 m、短軸 3.15 m程を検出した。

（覆土）掘り込みが浅く、覆土全体に焼土粒・炭化物が混入し、部分的に焼土・炭化材が集中していた。

（遺物出土状況）掘り下げに際し覆土中より出土した点数は少なく、焼土・炭化材が集中する地点から比較的まとまって土器が検出された。

（出土遺物）１以外、２～４は住居内からまとまって出土した。１は折り返し口縁となり、胴中位に最大径をもつ壺である。外面ハケ・ナデ整形された後ミガキが施される。２は胴部以下を残すが、胴下位に最大径をもつ壺、３はハケ･ナデ整形された鉢、４はミニュチェア土器であろうか、脚台部のみ残存しハケ整形される。

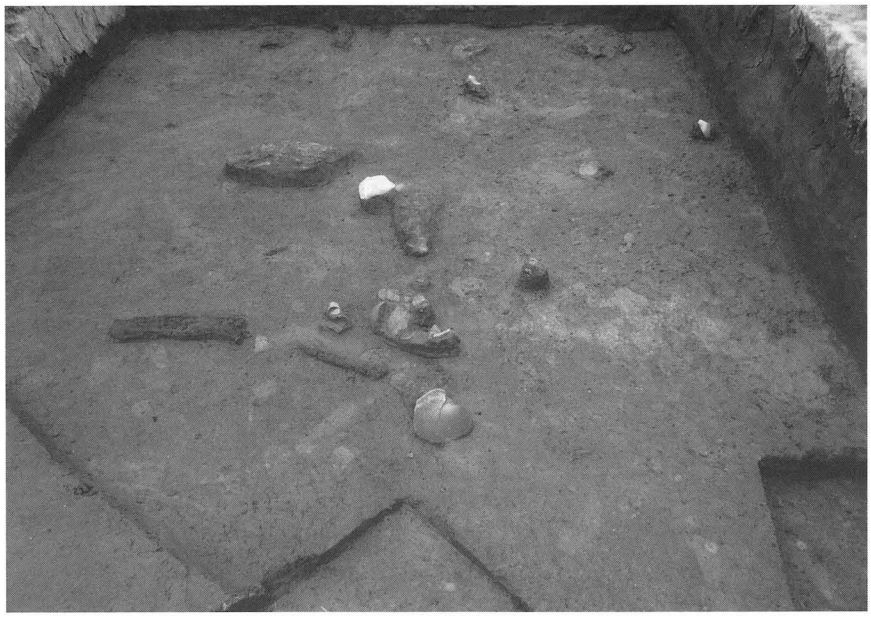
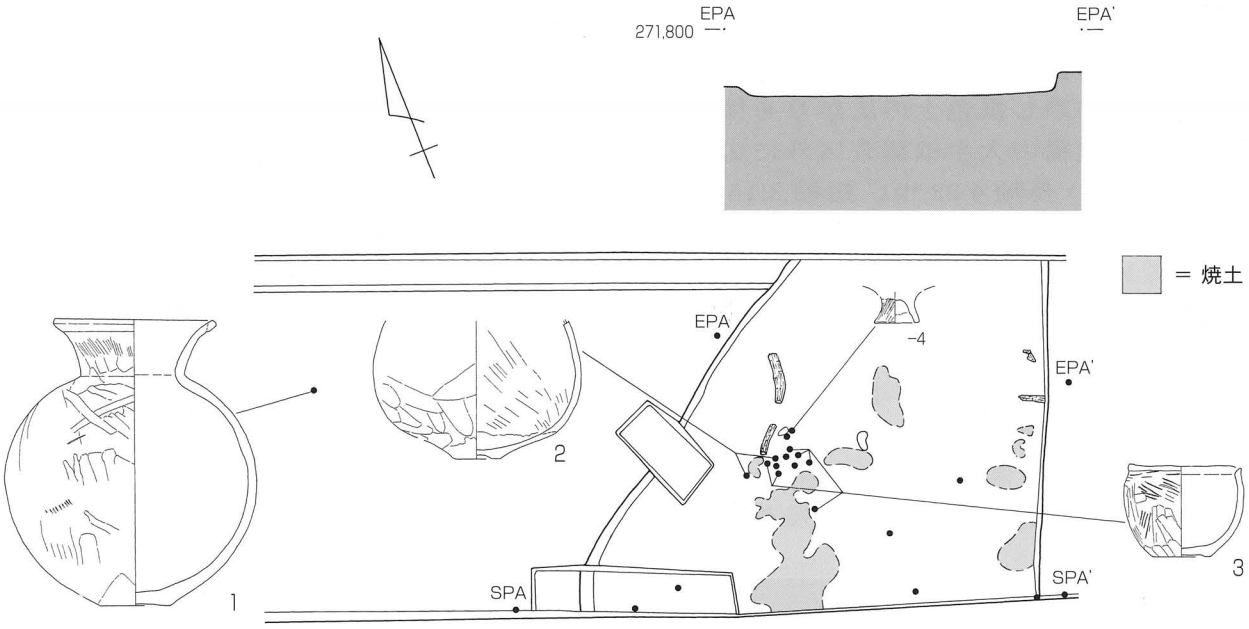
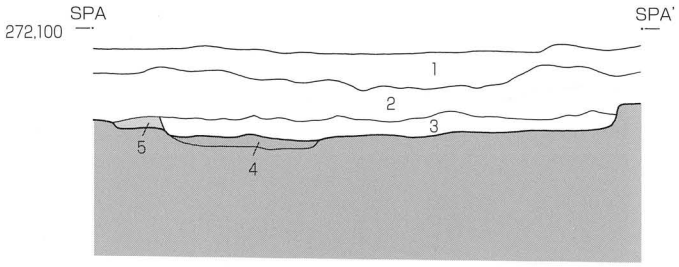


写真 23
8 号住遺物出土状況

写真 24
調査状況





1. 暗 褐 色 土 層　灰色粘質土が斑状に混る。
2. 黄 褐 色 土 層　砂粒を多く含み、褐色土が斑状に混る。
3. 黒褐色粘質土層　焼土・炭化物を多く含む。黄褐色土が斑状に混る。
4. 暗 褐 色 土 層　焼土・炭化物が混る。灰色粘質土が斑状に混る。
5. 暗 褐 色 土 層　褐色土・黄色土が斑状に混る。

0　2m

図 27　8 号住実測図

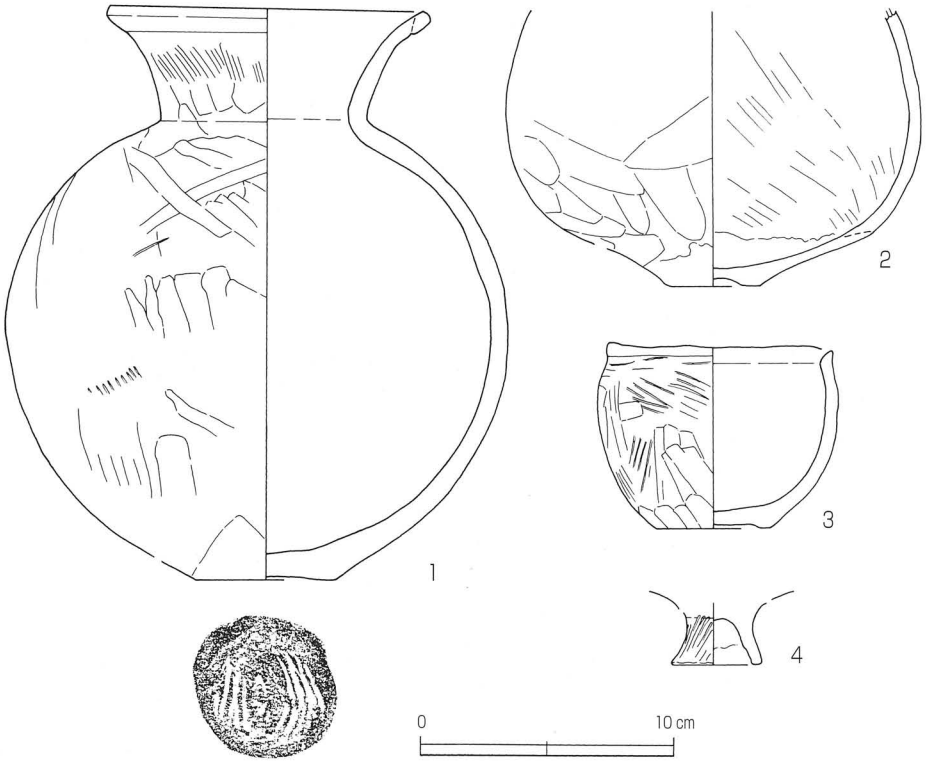


図 28　8 号住出土遺物

第２節　溝状遺構

１号溝（図 29,30）

調査区西側から東流するようである。調査期間中、湧水が絶えず溝底まで掘り下げるのは不可能であった。幅6.40～７.60ｍ、深さ１ｍ以上となり、覆土は砂礫と砂層の互層であった。出土遺物の多くが破片資料であり、１は隆帯文が施された縄文土器であろう。２以下は古墳時代後期に属す須恵器甕、土師器坏・高坏・甕である。２の須恵器甕は口縁部と底部を欠き、胴部のみである。胴中位に波状文が巡り、注口は破損する。３～５の坏は底部と口縁部との境に稜を有し、口縁部が直線的に立ち上がるもの(3)、須恵器坏身を模倣し口縁部が内折するもの(4)、丸底で半球形を呈するもの(5)がある。６～９の高坏は６のみ坏部形体が判明し、体部下位に強い稜をもち、逆台形状を呈す。脚部はいずれもハの字状に開く器形であるが、９のみ接合部が筒状の形体を呈する。外面赤彩され、坏部内面は黒色処理されている。10～13は甕胴部及び底部片となる。

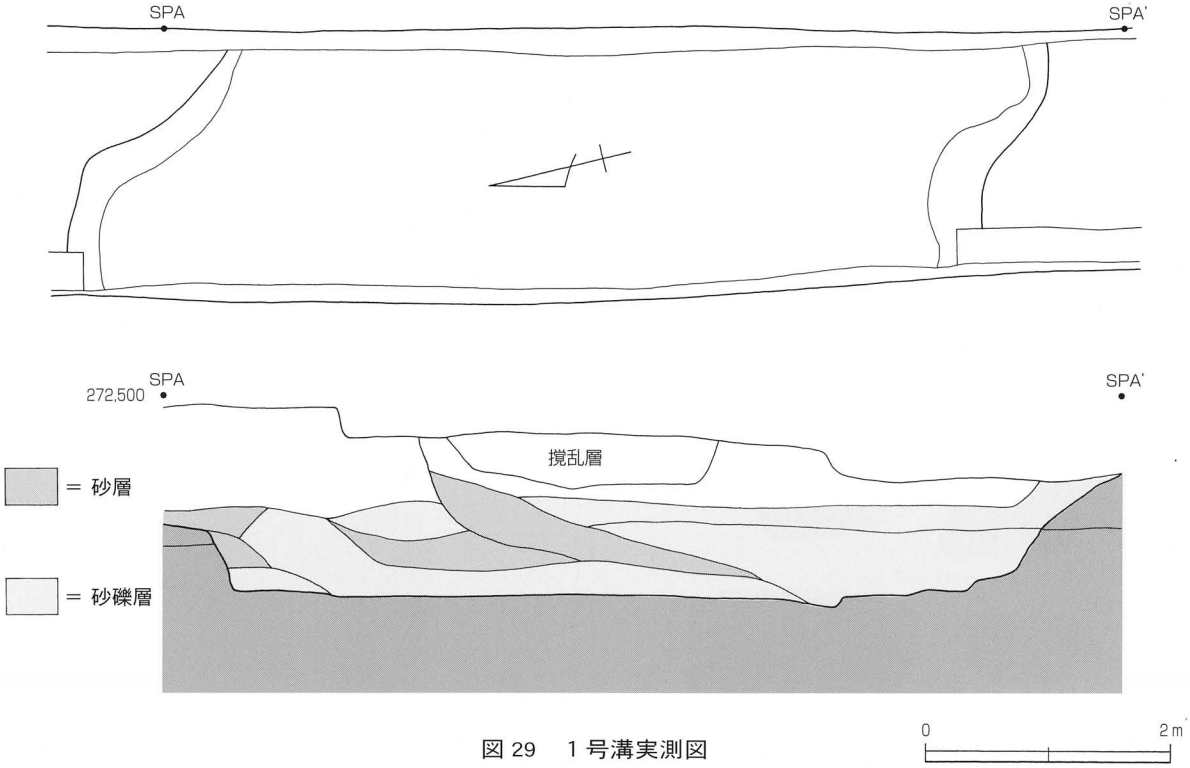


図 29　１号溝実測図

写真 25　１号溝土層堆積

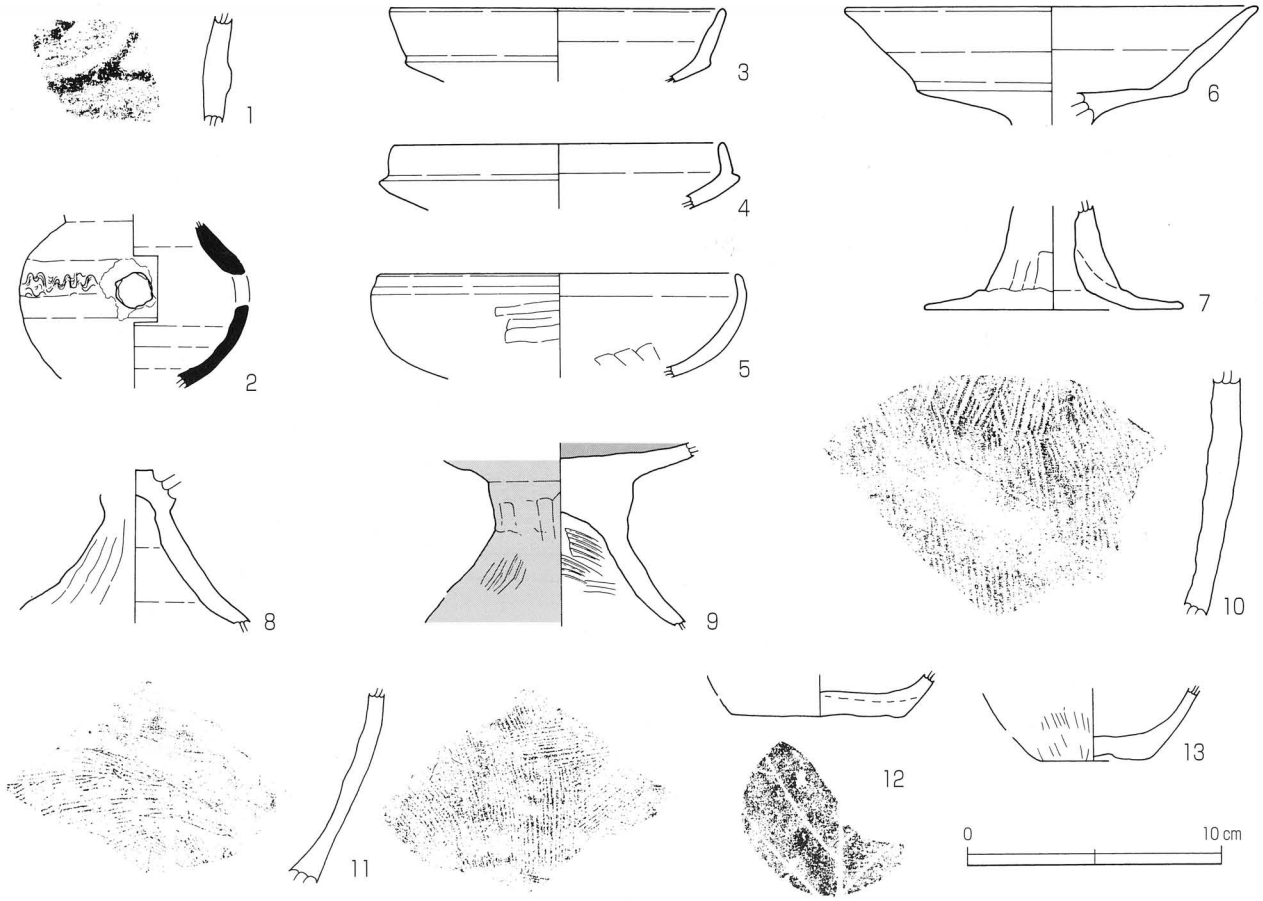


図 30　1 号溝出土遺物

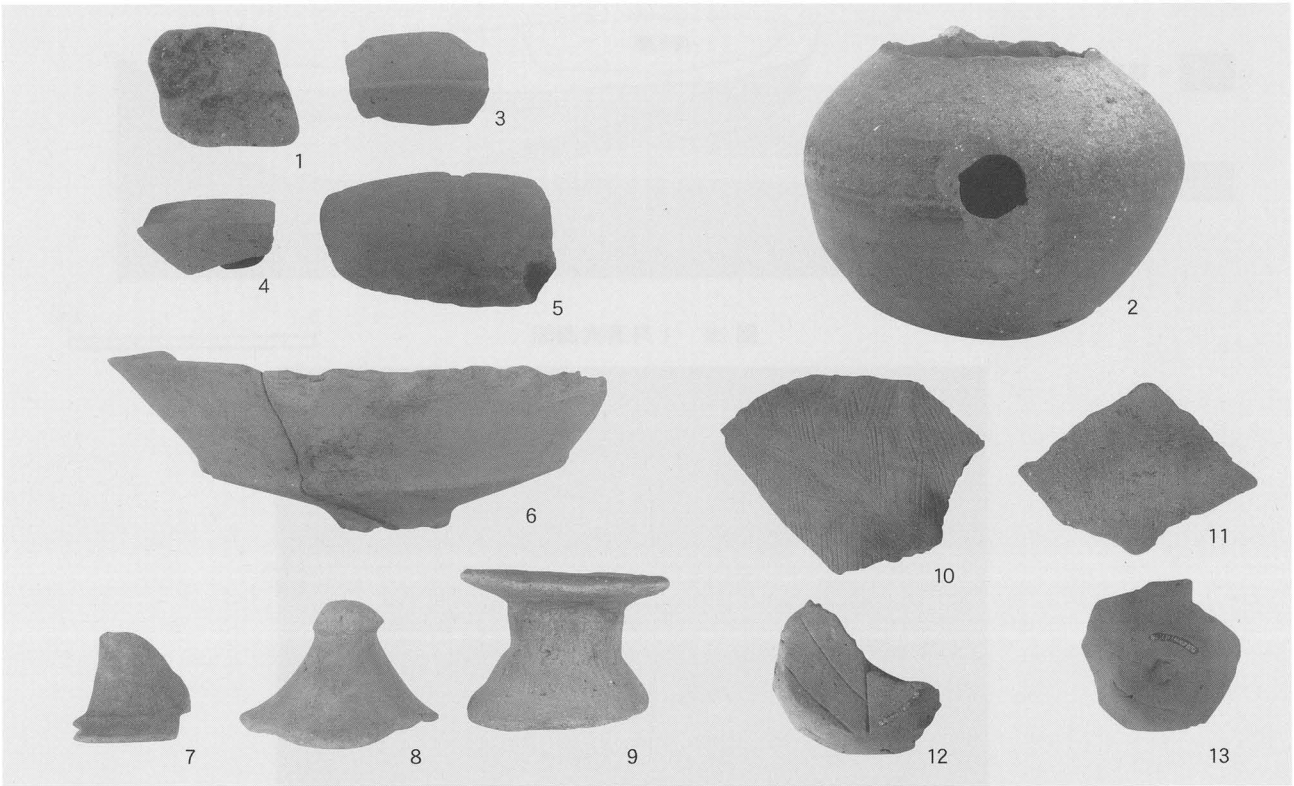


写真 26　1 号溝出土遺物

2号溝（図31,32）

調査区北側から検出し、やや湾曲しつつ南流するようである。時期は弥生時代後期であろう。幅0.75～1.35m、深さ0.40～0.46mを測り、断面U字状を呈する。覆土中に砂礫層が10cmほど堆積しており水の流れがあったことを裏付ける。出土遺物は7点図化した。1～5は弥生時代後期、6,7は時間的に幅をもたせ弥生時代後期から古墳時代初頭までの所産であろう。1は遺構外からの出土であるがここで取り上げた。口縁部を欠く壺であり、頸部に平行沈線を巡らしている。内面口縁部及び頸部以外、外面は赤彩されている。2は略完形の壺で、内外ハケ整形され、口縁部が「く」の字状に屈曲する。3～5の口縁部片は、口唇部に刻みを施した甕であろう。ハケ調整されるもの(3,4)、波長がくずれた波状文が施文されるもの(5)がある。6，7いずれもハケ調整された甕の胴部・底部片である。

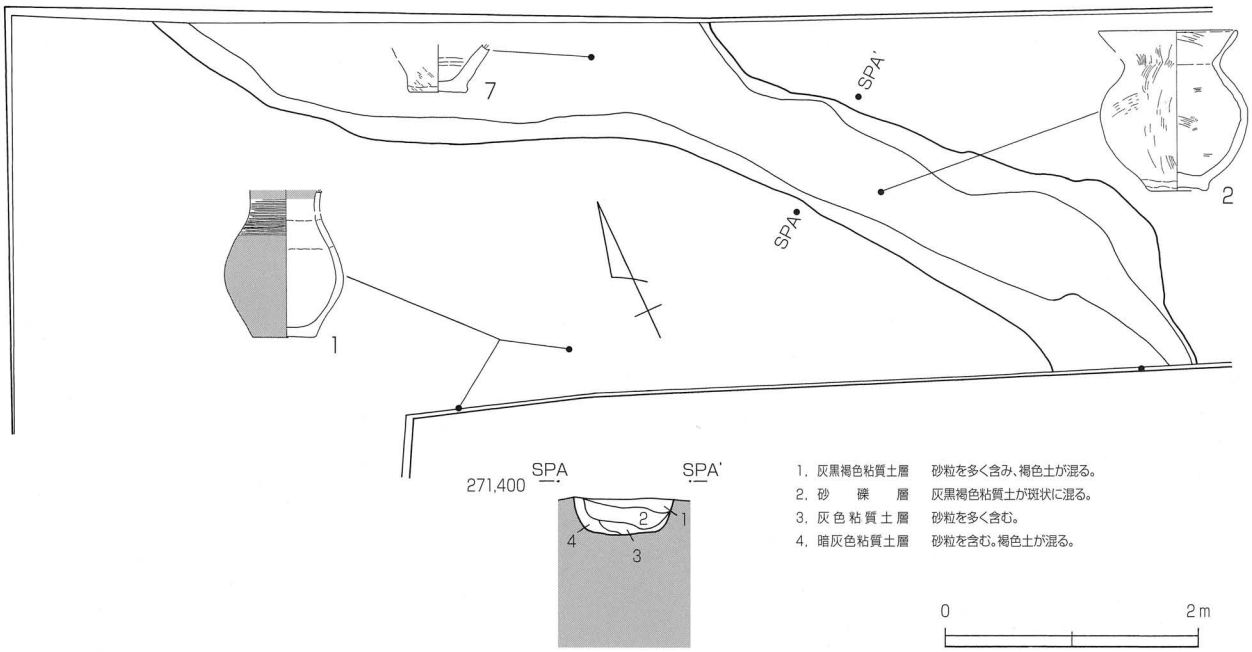


図31　2号溝実測図

写真27　2号溝完掘状況

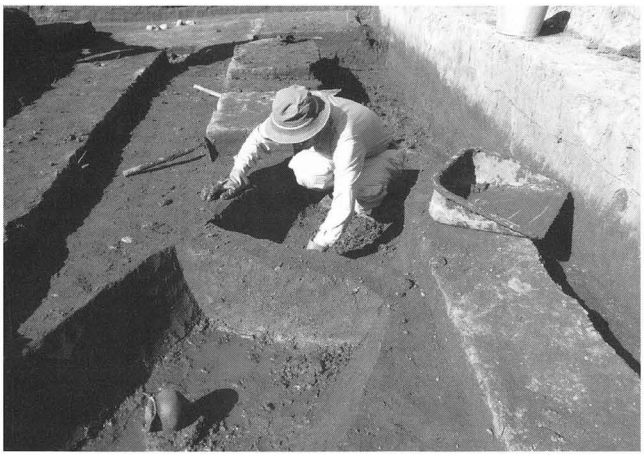


写真28　調査状況

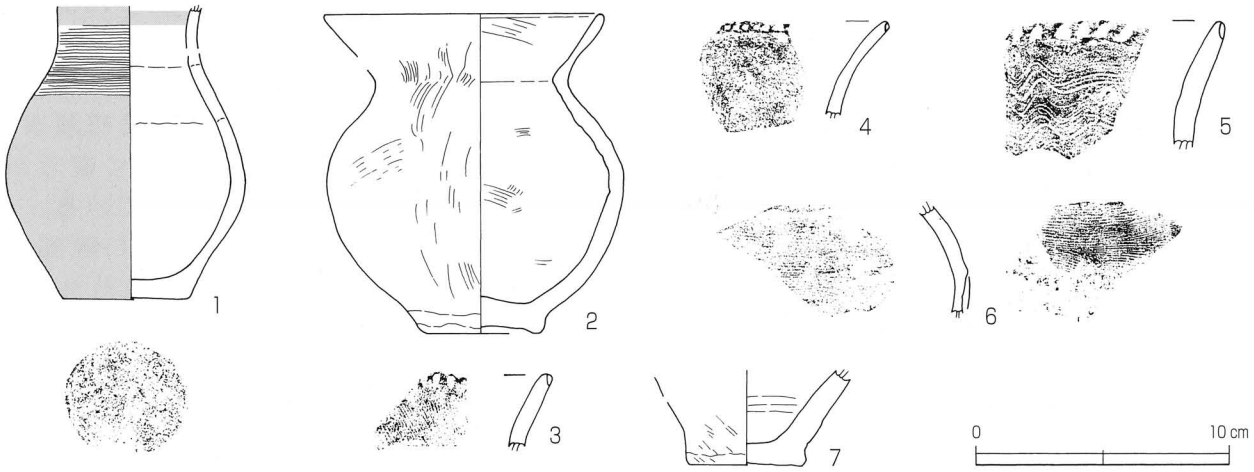


図 32　2 号溝出土遺物

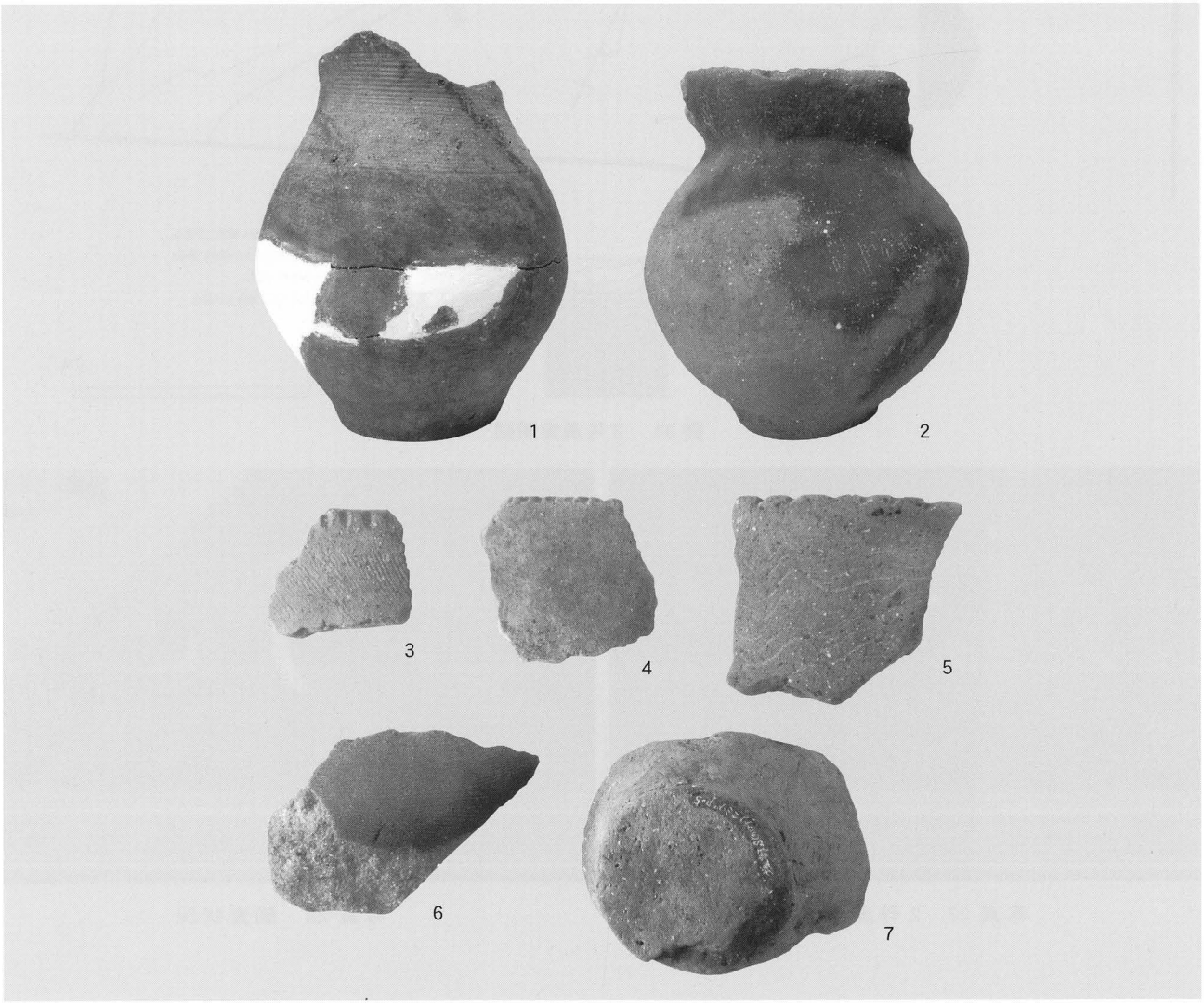
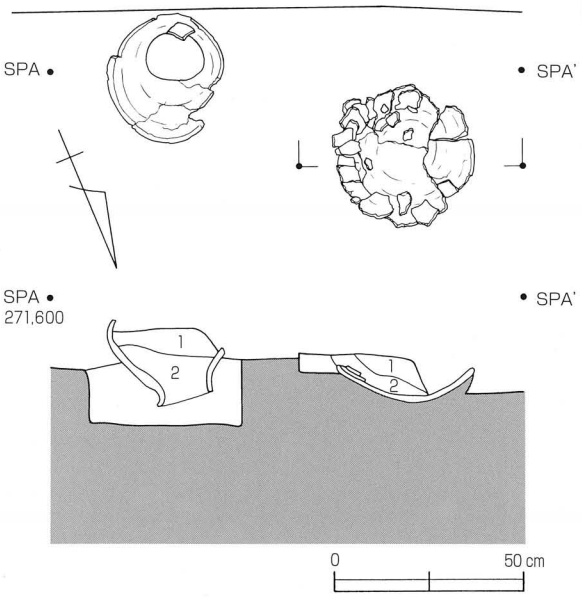


写真 29　2 号溝出土遺物

第３節　埋甕遺構（図 33,34、図版 5）

調査区西側から２基隣接して検出した。掘り込みはどちらも10cm程度確認しただけで、同一固体の壺上半と下半を約30cm離し、それぞれ個々に埋設したものであろう。壺上半は逆位に、下半は正位に据えてあった。他に出土遺物はなく、口縁部が横ナデされ、内外面ハケ・ナデ整形された古墳時代後期の壺である。

写真 30　検出状況



1．灰色土層　炭化物混ざる。砂粒を多く含む。粘性強い。
2．灰色土層　1層より黄色土を多く含む。粘性強い。

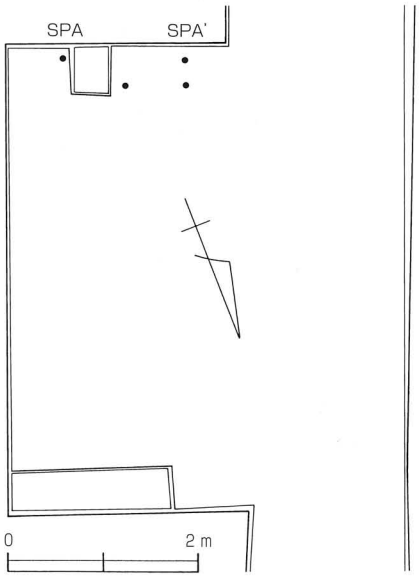


図 33　埋甕検出状況

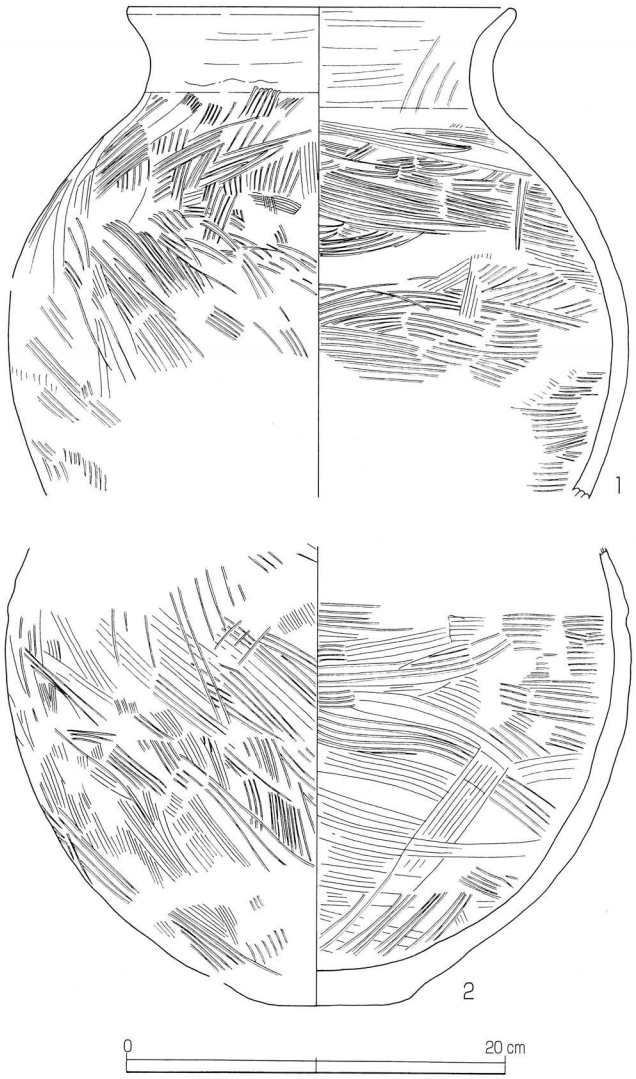


図 34　埋甕出土遺物

第４節　土坑（図 35,36、図版 5）

３，５号住居址に近接する。平面円形を呈し、南北 0.36 m、東西 0.37 m、深さ 0.22 mの規模を有し、断面鍋底状となる。出土遺物は少なく、土坑周辺から出土した２点を図化した。いずれも古墳時代後期の甕である。

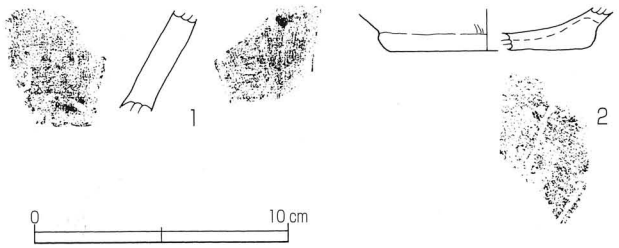
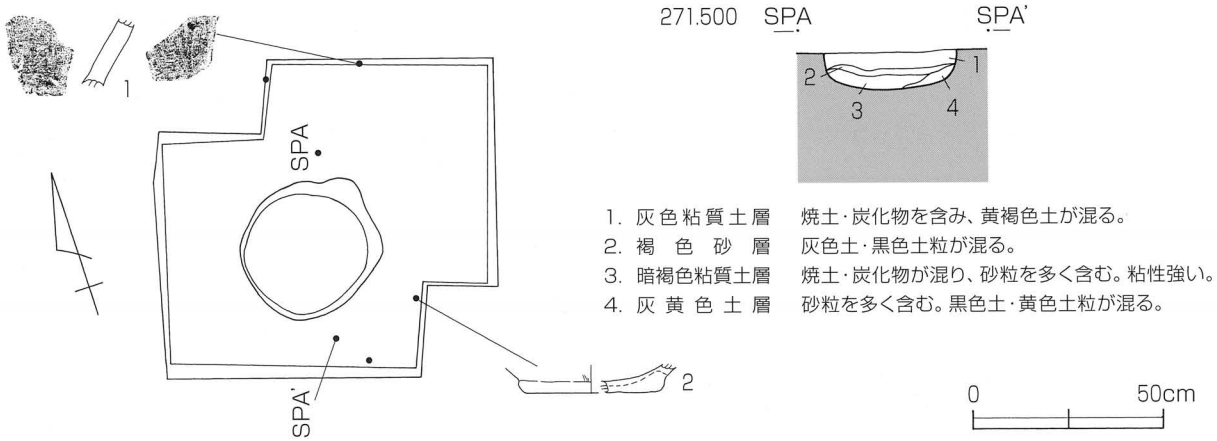


図 35　土坑出土遺物



1. 灰色粘質土層　焼土・炭化物を含み、黄褐色土が混る。
2. 褐色砂層　灰色土・黒色土粒が混る。
3. 暗褐色粘質土層　焼土・炭化物が混り、砂粒を多く含む。粘性強い。
4. 灰黄色土層　砂粒を多く含む。黒色土・黄色土粒が混る。

図 36　土坑実測図

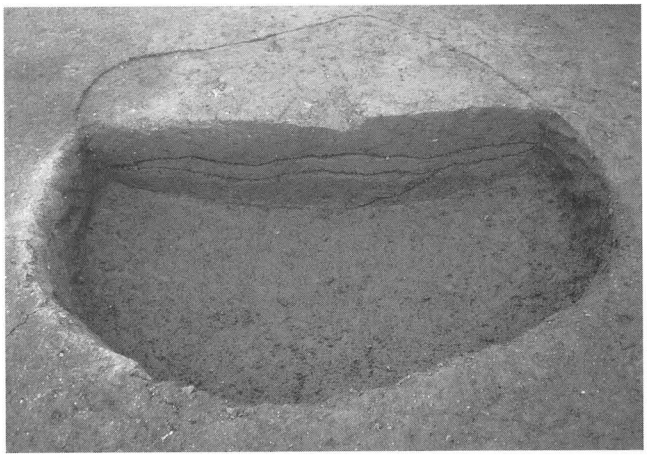


写真 31　土層堆積状況

写真 32　調査状況

第５節　遺構外出土遺物（図 37、図版 5）

遺構に伴わないものを取り上げる。１は古墳時代初頭の二重口縁壺の口縁部であろう。２は丸底で口縁部との境に稜を有する古墳時代後期の坏である。内外面赤彩されている。３は古墳時代後期の所産で、筒状の脚部を呈し、裾部がハの字に広がる高坏である。

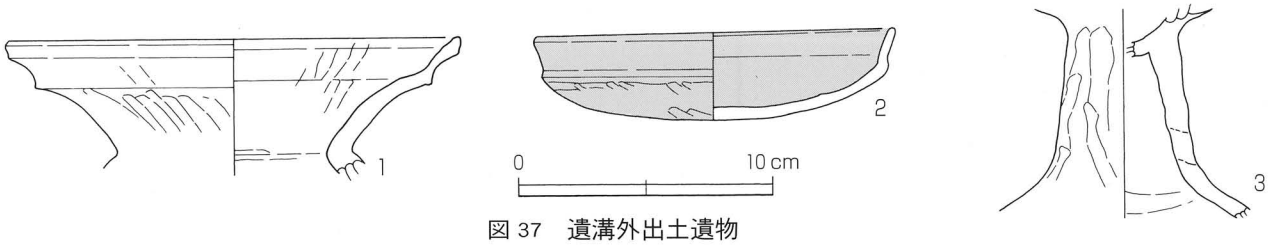


図 37　遺溝外出土遺物

第4章　まとめ

今回の調査で確認された遺構は、弥生時代後期の竪穴住居址１棟・溝状遺構１条、古墳時代後期の竪穴住居址７棟、溝状遺構１条、埋甕遺構２基、土坑１基である。出土遺物は、縄文・弥生時代の土器片の他、古墳時代後期の土師器・須恵器・土製品・石器などがある。遺構とともに多様な遺物を確認し、縄文･弥生時代から古墳時代にわたる複合遺跡となる。

縄文時代は、僅かに土器片が出土したのみで、遺構は確認されなかった。遺物の出土は、その時代の人間活動の証拠となるもので、貴重な発見であった。

弥生時代後期では、７号住居址・２号溝を確認した。口縁端部に刻みを有し、口縁部から頸部にかけ櫛描波状文が施される甕や内外面赤彩されるとともに、口縁部が大きくラッパ状に開き、頸部に平行沈線を巡らす壺など本遺跡から出土した当該期の土器系譜は、いわゆる中部高地系土器群が優勢を占めている。住居址覆土に焼土・炭化物が多く混じり、特に下層に炭化物が集中する状況は焼失家屋と推定できる。こうした焼失家屋の多さは当該期の大きな特徴の一つと指摘されており、本遺跡からも時代的な事象を確認することができた。遺構の一部を検出しただけであるが、当該期の人間活動を確認するとともに、盆地低地での事例を得ることができ大きな成果であった。

今回の調査では、検出遺構・出土遺物の大部分が古墳時代後期に属し、当該調査の中心をなしている。住居址の規模・形態は一辺４～５ｍ程の方形となり、壁際にカマドを設けている。カマドを確認したのが３．５．６号住居址の３棟であり、そのうち５．６号住は焼土が集中する状況からその位置を推定したが、形状・構築状況などは他遺構との重複あるいはカマド廃絶に伴う祭祀行為などにより判然としない。唯一規模が判明する３号住カマドは、長軸 1.02 ｍ、短軸 0.71 ｍ程の規模となり袖石・支柱石などは確認できず、構築材と推定される径 10㎝程の小礫が多数集中していた。

出土土器の多半は６世紀第４四半世紀～７世紀第１四半世紀に比定でき、検出住居に重複が見られるためこの間、二、三度の建て替えを繰り返しつつ集落が営まれ続けたと推量できる。今後の調査の積み重ねにより当時の実像がより鮮明となるであろう。

おわりに

検出数・出土量の多寡はあるが、検出遺構及び出土遺物はそれぞれ当該時期の人間活動を明らかにする重要な発見であった。本報告は限られた時間の中でまとめたものであり、遺構と出土遺物を中心に資料化に努め、呈示した。調査の成果と資料の詳細な検討・考察が行われず不十分な点は否めないが、本書が今後の調査・研究に少しでも資することが出来れば幸いである。

遺物観察表（1）　（　）は復元値

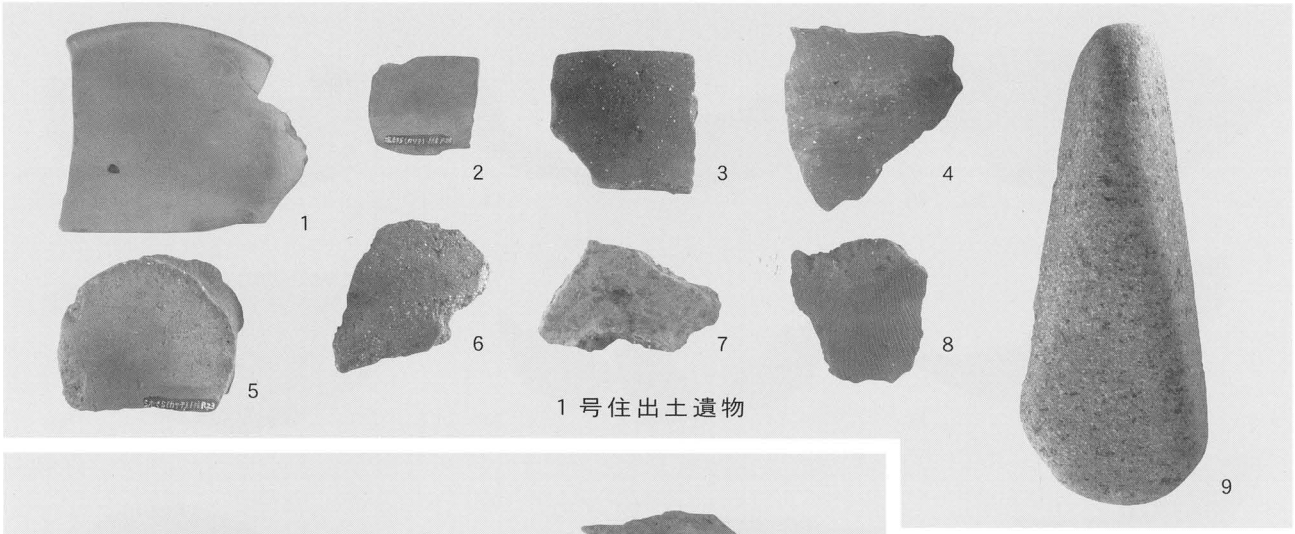
図	No.	出土位置	種類・器形	法量（cm）			部位	観察所見（調整・文様・時代・その他）	胎土	備考
				口径	器高	底径				
2	1	試掘坑2	土器　壺				頸部	頸部平行沈線、内面ハケ、内外面赤彩、弥生後期	密	
2	2	試掘坑2	土師器　甕				胴部	外面ハケ、内面ナデ	密	
2	3	試掘坑3	土器　壺				口縁部	折り返し口縁、口唇部刻み目、弥生後期	密	
2	4	試掘坑3	土器　壺				口縁部	折り返し口縁、弥生後期	密	
2	5	試掘坑3	土器　甕				口縁部	外面櫛描波状文、弥生後期	密	
2	6	試掘坑3	土師器　甕				胴部	内外面ハケ	やや粗	
2	7	試掘坑3	土師器　甕		残高2.2	(4.8)	底部	内外面ハケ・ナデ	密	
2	8	試掘坑3	土師器　甕		残高3.5	(10.5)	底部	外面ハケ・ナデ	やや粗	
2	9	試掘坑3	土師器　壺		残高2.3	(8.8)	底部	内外面ナデ	やや粗	
9	1	1号住	土師器　坏	(14.0)	3.8		口縁～底部	外面手持ちヘラケズリ、内面ナデ、底部手持ちヘラケズリ 古墳後期	密	
9	2	1号住	土師器　坏	(14.0)	(2.7)		口縁～体部	外面口縁部ナデ・体部手持ちヘラケズリ、内面ナデ、古墳後期	密	
9	3	1号住	土師器　甕	(15.0)	残高5.0		口縁部	内外面ナデ	密	
9	4	1号住	土師器　甕		残高7.6		頸部～胴部	外面ハケ、内面ハケ・ナデ	やや粗	
9	5	1号住	土師器　甕		残高2.0	6.4	底部	外面ハケ、内面ハケ・ナデ、底部ナデ	密	
9	6	1号住	土師器　壺		残高2.7	(8.0)	底部	外面ナデ・ハケ、内面ハケ、底部ナデ	密	
9	7	1号住	土師器　高坏		残高2.0		坏部	外面ハケ後ナデ、内面ハケ	密	
9	8	1号住	土師器　甕				胴部	外面ハケ	密	
9	9	1号住	石器　磨石	長18.0、幅7.2、厚3.9				磨面4面、石材＝安山岩、重量656 g		
10	1	2号住	土師器　坏	12.1	4.7		完形	外面手持ちヘラケズリ後ミガキ、内面ナデ後ミガキ 内外面タール付着、内面黒色処理、古墳後期		
10	2	2号住	土師器　高坏		残高6.2	10.7	脚部	外面ヘラケズリ・ロクロナデ、内面ナデ、古墳後期		
10	3	2号住	土師器　鉢	(16.2)	10.5	8.0	口縁～底部	内外面ハケ後ナデ、内面ナデ・輪積み痕、古墳後期		
10	4	2号住	石器　磨石	長10.8、幅10.6、厚7.4				磨面2面、石材＝安山岩、重量1100 g		
15	1	3号住	須恵器　坏	(10.2)	残高2.5		口縁部～体部	内外面ロクロナデ	密	
15	2	3号住	土師器　坏	(12.8)	3.9		口縁～底部	外面手持ちヘラケズリ・口縁部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15	3	3号住	土師器　坏	(12.0)	3.2		口縁～底部	外面手持ちヘラケズリ・口縁部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15	4	3号住	土師器　坏	12.1	3.9		口縁～底部	外面手持ちヘラケズリ・口縁部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15	5	3号住	土師器　坏	(12.0)	4.0		口縁～底部	外面手持ちヘラケズリ・口縁部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15	6	3号住	土師器　坏	(10.0)	2.8		口縁～底部	外面手持ちヘラケズリ・口縁部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15	7	3号住	土師器　甕	(18.0)	残高6.1		口縁部	外面口縁部ハケ後ナデ・胴部ケズリ、内面ハケ後ナデ 古墳後期	密	
15	8	3号住	土師器　甕		残高3.7	(6.8)	底部	内外面ナデ	密	
15	9	3号住カマド	土師器　坏	15.3	5.9		略完形	外面手持ちヘラケズリ・口縁部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15	10	3号住カマド	土師器　坏	(13.0)	4.5		口縁～底部	外面手持ちヘラケズリ・口縁部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15	11	3号住カマド	土師器　坏	12.6	3.5		口縁～底部	外面手持ちヘラケズリ・口縁部横ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
15	12	3号住カマド	土師器　坏	12.6	3.9		口縁～底部	外面手持ちヘラケズリ・口縁部横ナデ 内面ナデ後ミガキ、古墳後期	密	
15	13	3号住カマド	土師器　坏	(11.6)	4.5		口縁～底部	外面手持ちヘラケズリ後ミガキ・口縁部横ナデ 内面ナデ・ミガキ、古墳後期	密	
15	14	3号住カマド	土師器　坏	13.0	4.1		口縁～底部	外面手持ちヘラケズリ・口縁部横ナデ 内面ナデ・ミガキ、内面黒色処理、古墳後期	密	
15	15	3号住カマド	土師器　高坏	13.9	残高5.4		坏部	外面ケズリ・ナデ・ミガキ、内面ナデ・ミガキ、内外面赤彩 古墳後期	密	
15	16	3号住カマド	土師器　高坏	(14.6)	10.5	10.0	口縁～脚部	外面ケズリ・ナデ、内面ナデ・ミガキ、古墳後期	密	
15	17	3号住カマド	土師器　高坏	16.0	10.9	11.0	略完形	外面ケズリ・ナデ、内面ナデ、内外面赤彩、古墳後期	密	
15	18	3号住カマド	土師器　甑	(18.8)	9.5	(6.2)	口縁～底部	外面ハケ後ナデ、内面ナデ・輪積み痕、古墳後期	密	

遺物観察表（2）　（　）は復元値

図	No.	出土位置	種類・器形	法量（cm）			部位	観察所見（調整・文様・時代・その他）	胎土	備考
				口径	器高	底径				
15	19	3号住カマド	土師器　甕	(18.0)	残高 17.0		口縁～胴部	外面ハケ後ナデ・ケズリ、内面ハケ後ナデ・輪積み痕 古墳後期	密	
15	20	3号住カマド	土師器　甕	(16.0)	残高 7.3		口縁部	外面ハケ後ナデ、内面ハケ後ナデ、古墳後期	密	
15	21	3号住カマド	土師器　甕	(18.0)	残高 5.4		口縁部	内外面ハケ後横ナデ、古墳後期	密	
15	22	3号住カマド	土師器　甕		残高 2.8	(8.0)	底部	外面ハケ・ナデ、内面ナデ、底部ナデ、古墳後期	密	
15	23	3号住カマド	土師器　壺		残高 8.5	4.0	胴部～底部	外面ヘラケズリ・ナデ、内面ナデ、底部ヘラケズリ・ナデ 古墳後期	密	
16	24	3号住カマド	土師器　壺		残高 17.5	8.0	胴部～底部	内外面ハケ後ナデ、底部ナデ、古墳後期	密	
16	25	3号住カマド	土師器　壺		残高 6.3	(9.0)	底部	外面ハケ後ナデ、内面ハケ・ナデ、古墳後期		
16	26	3号住	石器　磨石	長 11.2、幅 9.5、厚 4.3				磨面２面、石材＝安山岩、重量 480 g		
16	27	3号住	石器　磨石	長 28.0、幅 9.3、厚 7.1				磨面１面、石材＝安山岩、重量 1800 g		
17	1	4号住	土師器　甕		残高 2.4	(5.0)	底部	外面ハケ・ナデ、内面ハケ	密	
17	2	4号住	土師器　甕		残高 2.3	(5.0)	底部	外面ハケ、内面指頭痕	密	
21	1	5号住	土師器　坏	(10.5)	4.6		略完形	口縁部内外面ロクロナデ、外面ケズリ後ミガキ、内面ミガキ 古墳後期	密	
21	2	5号住	土師器　坏	(12.8)	4.0		口縁～底部	口縁部内外面ロクロナデ、外面ケズリ、内面ナデ、古墳後期	密	
21	3	5号住	土師器　甕	18.7	29.1	7.0	完形	外面ハケ・ナデ、内面ハケ、古墳後期	密	
21	4	5号住	土師器　甕	13.6	22.7	6.0	完形	内外面ハケ・ナデ、底部ナデ、古墳後期	密	
21	5	5号住	土師器　甕	(19.8)	残高 6.0		口縁部	内外面ハケ後ナデ、古墳後期	密	
21	6	5号住	土師器　甕		残高 10.8	(6.0)	胴部～底部	内外面ハケ後ナデ、底部ナデ、古墳後期	密	
21	7	5号住	土師器　甕		残高 14.8	(5.0)	胴部～底部	外面ハケ、内面ナデ・指頭痕、底部ナデ、古墳後期	密	
21	8	5号住	土師器　甕				胴部	内外面ハケメ、古墳後期	密	
21	9	5号住	土師器　甕	(14.4)	残高 10.3		口縁～胴部	外面ハケ後ナデ、内面ナデ、古墳後期	密	
21	10	5号住	土師器　壺	(14.1)	12.6		口縁～底部	外面ナデ、内面ナデ・輪積み痕、古墳初頭	密	
21	11	5号住	土師器　器台		3.4	(8.8)	脚部	内外面ナデ、古墳初頭	密	
24	1	6号住	土師器　坏	(14.0)	残高 3.0		口縁～体部	口縁部内外面ロクロナデ、外面底部ケズリ、内面ナデ、古墳後期	やや粗	
24	2	6号住	土師器　坏	(13.0)	4.5		口縁～底部	口縁部内外面ロクロナデ、外面底部ケズリ、内面ナデ、古墳後期	密	
24	3	6号住	土師器　甕	20.2	21.6	7.5	完形	外面煤付着、内外面ハケ後ナデ、古墳後期	密	
24	4	6号住	土師器　甕	18.0	26.8	8.0	完形	内外面ハケ・ナデ、古墳後期		
24	5	6号住	土師器　甕	12.3	16.2	5.9	完形	内外面ハケ後ナデ、古墳後期	密	
24	6	6号住	土師器　甕		残高 5.6	5.6	底部	外面ハケメ、内面ハケ後ナデ、底部ナデ、古墳後期	密	
24	7	6号住	土師器　壺		残高 19.0		頸部～胴部	内外面ハケ後ナデ、古墳後期	密	
24	8	6号住	土師器　壺		残高 5.6	(9.0)	底部	外面ハケ・ケズリ、内面ハケ、古墳後期	密	
24	9	6号住	土師器　甑		残高 10.0	8.0	胴部～底部	外面ハケ、内面ナデ・輪積み痕、古墳後期	密	
24	10	6号住	土製品　支柱石	長 21.4、最大径 11.2			完形	ナデ、指頭跡、被熱	密	
26	1	7号住	土器　壺	8.1	残高 11.7		口縁～胴部	口縁部内外面赤彩・貼付文４個１セット４単位、外面ハケ後ナデ、内面ハケメ、弥生後期	密	
26	2	7号住	土器　壺	(9.0)	残高 2.1		口縁部	棒状浮文２ヶ貼付、内外面ナデ、弥生後期	密	
26	3	7号住	土器　壺	(8.6)	残高 4.3		口縁部	内外面ナデ、口唇部刻み目、弥生後期	密	
26	4	7号住	土器　壺	(14.0)	残高 5.4		口縁部	内外面ナデ・赤彩、弥生後期	やや粗	
26	5	7号住	土器　甕	(13.0)	残高 4.3		口縁部	外面櫛描波状文、内面ナデ、弥生後期	密	
26	6	7号住	土器　甕	(16.0)	残高 12.5		口縁～胴部	口縁部刻み目、外面ハケメ、内面口縁部ハケメ・胴部ナデ、弥生後期	密	
26	7	7号住	土器　甕				頸部	外面櫛描波状文、内面ハケ、弥生後期	密	
26	8	7号住	土器　甕		残高 2.5	6.8	底部	内外面ナデ	密	

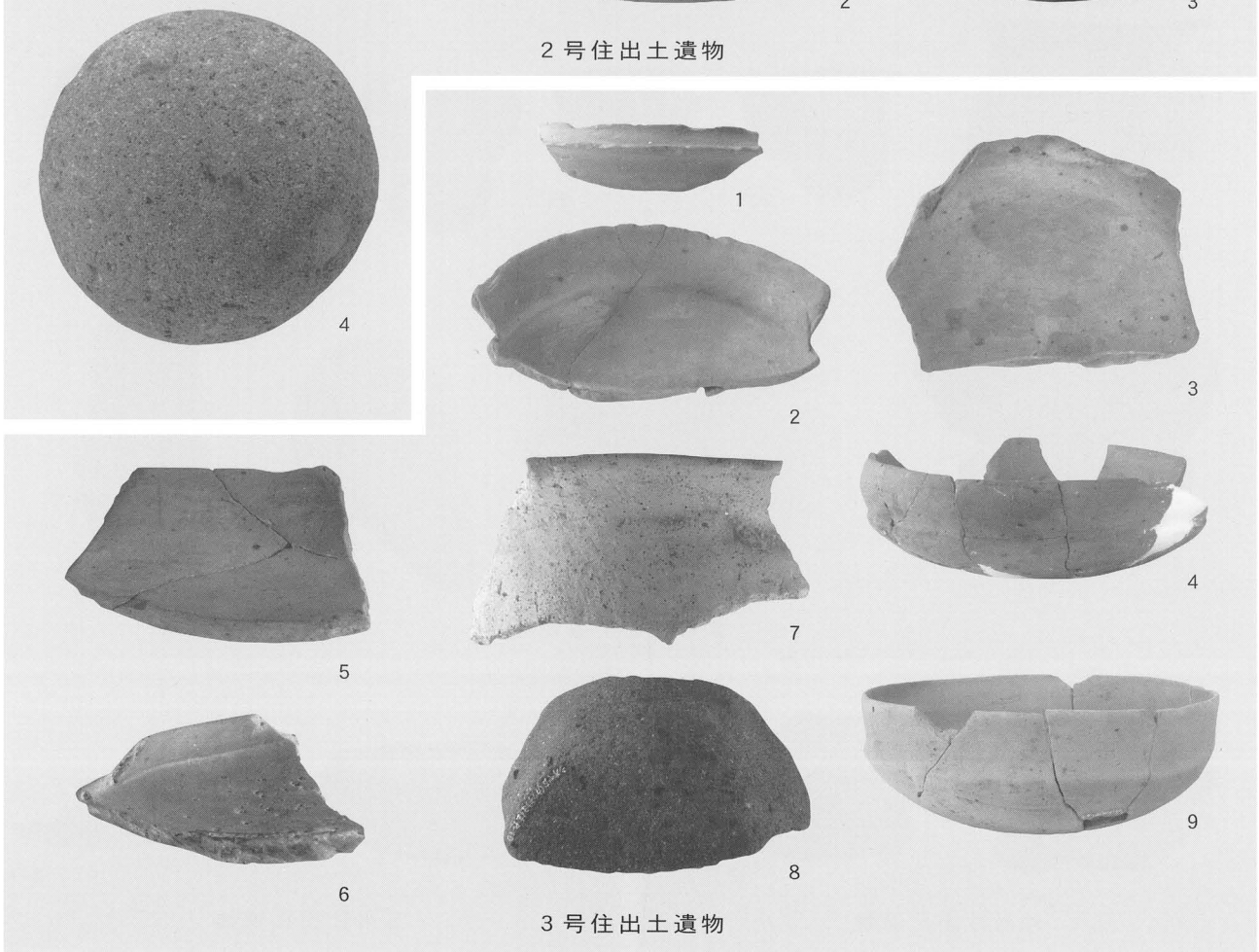
遺物観察表（3）　（　）は復元値

図	No.	出土位置	種類・器形	法量（cm）			部位	観察所見（調整・文様・時代・その他）	胎土	備考
				口径	器高	底径				
28	1	8号住	土器　壺	13.2	24.4	5.9	完形	折り返し口縁、外面ハケ・ナデ後ミガキ、内面ナデ、弥生後期	密	
28	2	8号住	土師器　壺		残高 11.7	4.0	胴部～底部	外面ナデ、内面ヘラナデ、輪積み痕	密	
28	3	8号住	土師器　鉢	9.5	7.9	4.7	完形	外面ハケ・ナデ、内面ナデ、底部ナデ	密	
28	4	8号住	ミニュチュア土器		残高 2.6	3.8	脚台部	外面ハケ、内面ナデ、指頭痕	密	
30	1	1号溝	縄文土器　深鉢				胴部	隆帯文	密	
30	2	1号溝	須恵器　甕		残高 7.5		胴部	胴部穿孔1ヶ、外面櫛描波状文、内外面ロクロナデ	密	
30	3	1号溝	土師器　坏	(13.0)	残高 2.9		口縁部	内外面ナデ、古墳後期	密	
30	4	1号溝	土師器　坏	(14.0)	残高 2.6		口縁部	内外面ナデ、古墳後期	密	
30	5	1号溝	土師器　坏	(14.0)	残高 4.1		口縁部	内外面ヘラナデ、古墳後期	密	
30	6	1号溝	土師器　高坏	(16.0)	残高 4.7		坏部	内外面ロクロナデ、古墳中期～後期	密	
30	7	1号溝	土師器　高坏		残高 4.1	(10.5)	脚部	外面ヘラケズリ、内面ナデ、古墳後期	密	
30	8	1号溝	土師器　高坏		残高 6.1		脚部	外面ヘラナデ、内面ナデ	密	
30	9	1号溝	土師器　高坏		残高 7.2		脚部	坏部内面黒色処理、外面ヘラナデ・ハケ・赤彩、脚部内面ハケ	密	
30	10	1号溝	土師器　甕				胴部	内外面ハケメ、古墳後期	密	
30	11	1号溝	土師器　甕				胴部	内外面ハケメ、古墳後期	密	
30	12	1号溝	土師器　甕		残高 2.9	(4.6)	底部	外面ハケ・ヘラナデ、内面ナデ	密	
30	13	1号溝	土師器　甕		残高 1.5	(7.2)	底部	内外面ナデ、底部木葉痕	密	
32	1	2号溝	土器　壺		残高 12.4	5.2	頸部～底部	頸部平行沈線、外面ハケ後ミガキ、内面ハケ後ナデ、輪積み痕 口縁部内外面及び外面胴部赤彩、弥生後期	密	
32	2	2号溝	土器　壺	9.6	12.7	4.1	略完形	内外面ハケ・ナデ、弥生後期	密	
32	3	2号溝	土器　甕		残高 2.8		口縁部	口唇部刻み目、内外面ハケ、弥生後期	密	
32	4	2号溝	土器　甕		残高 3.8		口縁部	口唇部刻み目、内面ハケ、弥生後期	密	
32	5	2号溝	土器　甕		残高 5.0		口縁部	口唇部刻み目、外面櫛描波状文、内面ナデ、弥生後期	密	
32	6	2号溝	土師器　甕				胴部	内外面ハケメ	密	
32	7	2号溝	土師器　甕		残高 4.5	3.4	底部	ハケ後ナデ	密	
34	1	埋甕	土師器　壺	20.3	残高 26.0		口縁～胴部	口縁部横ナデ、内外面ハケ後ナデ	密	2と同一個体
34	2	埋甕	土師器　壺		残高 24.1	8.9	胴部～底部	内外面ハケ後ナデ	密	1と同一個体
35	1	土坑1	土師器　甕				胴部	外面ハケ・ナデ、内面ナデ	密	
35	2	土坑1	土師器　甕		残高 1.5	(7.5)	底部	内外面ハケ・ナデ、底部木葉痕	密	
37	1	調査区一括	土師器　壺	(17.6)	残高 5.3		口縁部	内外面ヘラナデ・ロクロナデ、古墳初頭	密	
37	2	調査区一括	土師器　坏	14.0	3.6		略完形	内外面赤彩、外面手持ちヘラケズリ・ナデ後ミガキ 内面ナデ後ミガキ、古墳後期	密	
37	3	調査区一括	土師器　高坏		残高 8.4		脚部	内外面ヘラナデ、古墳後期	密	



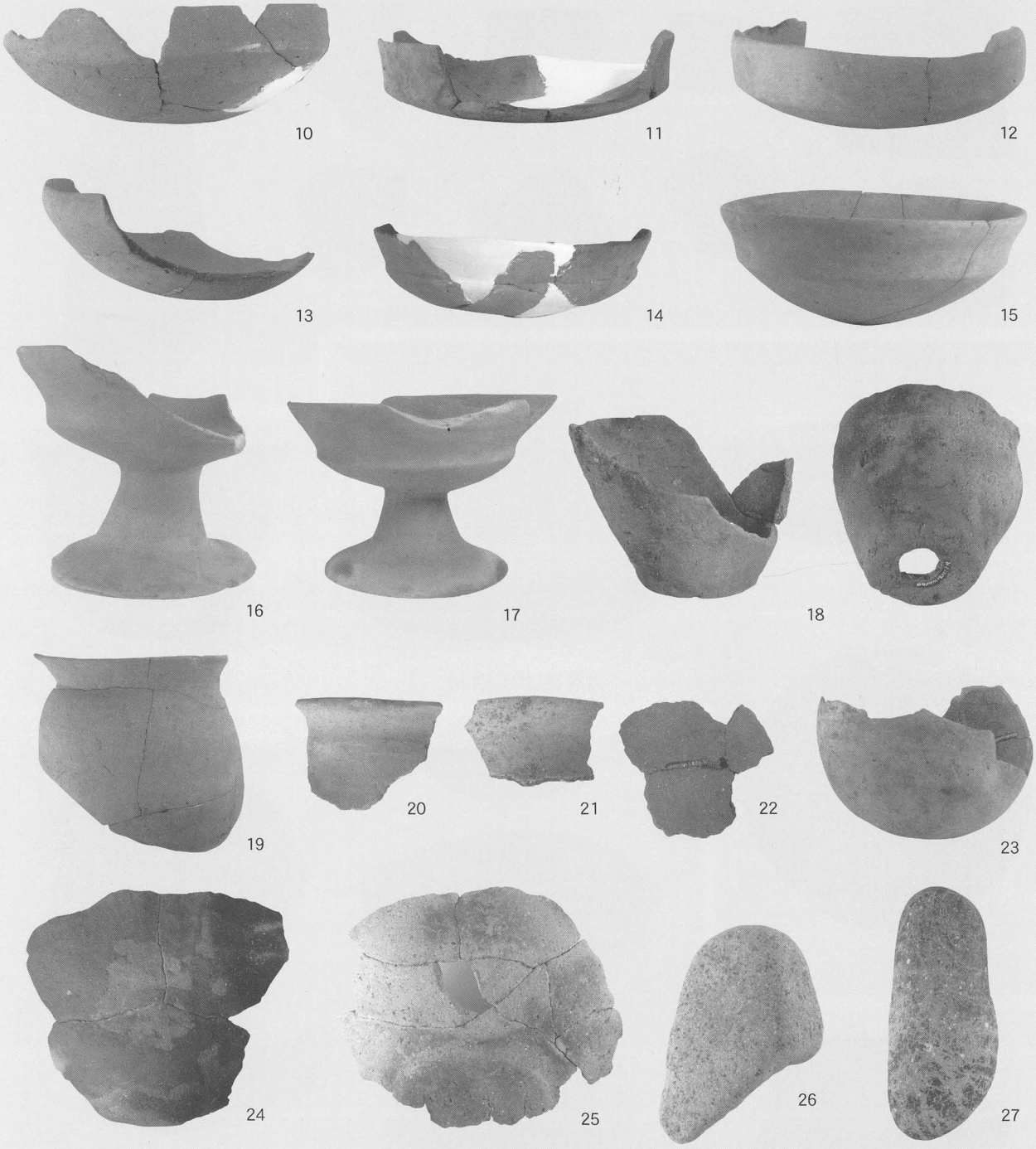
1 号住出土遺物

2 号住出土遺物

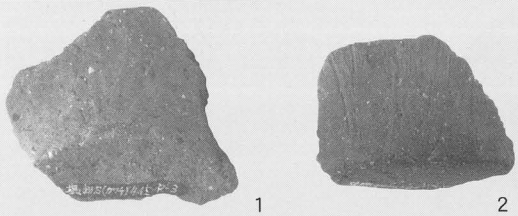


3 号住出土遺物

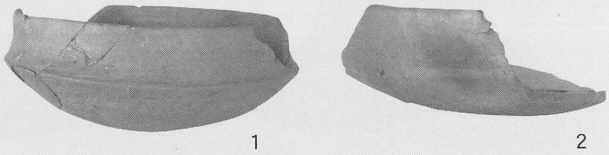
図版２



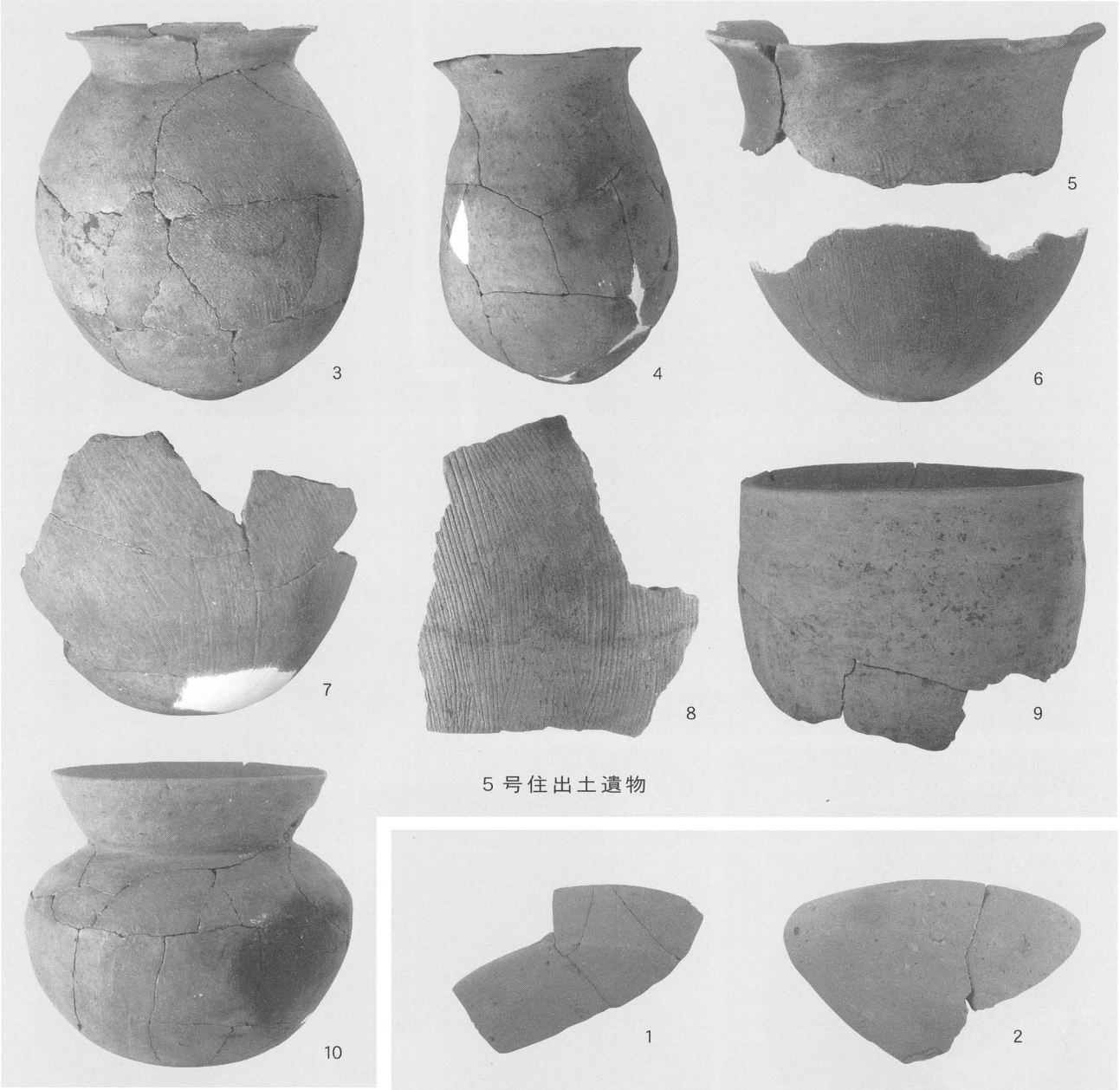
３号住出土遺物



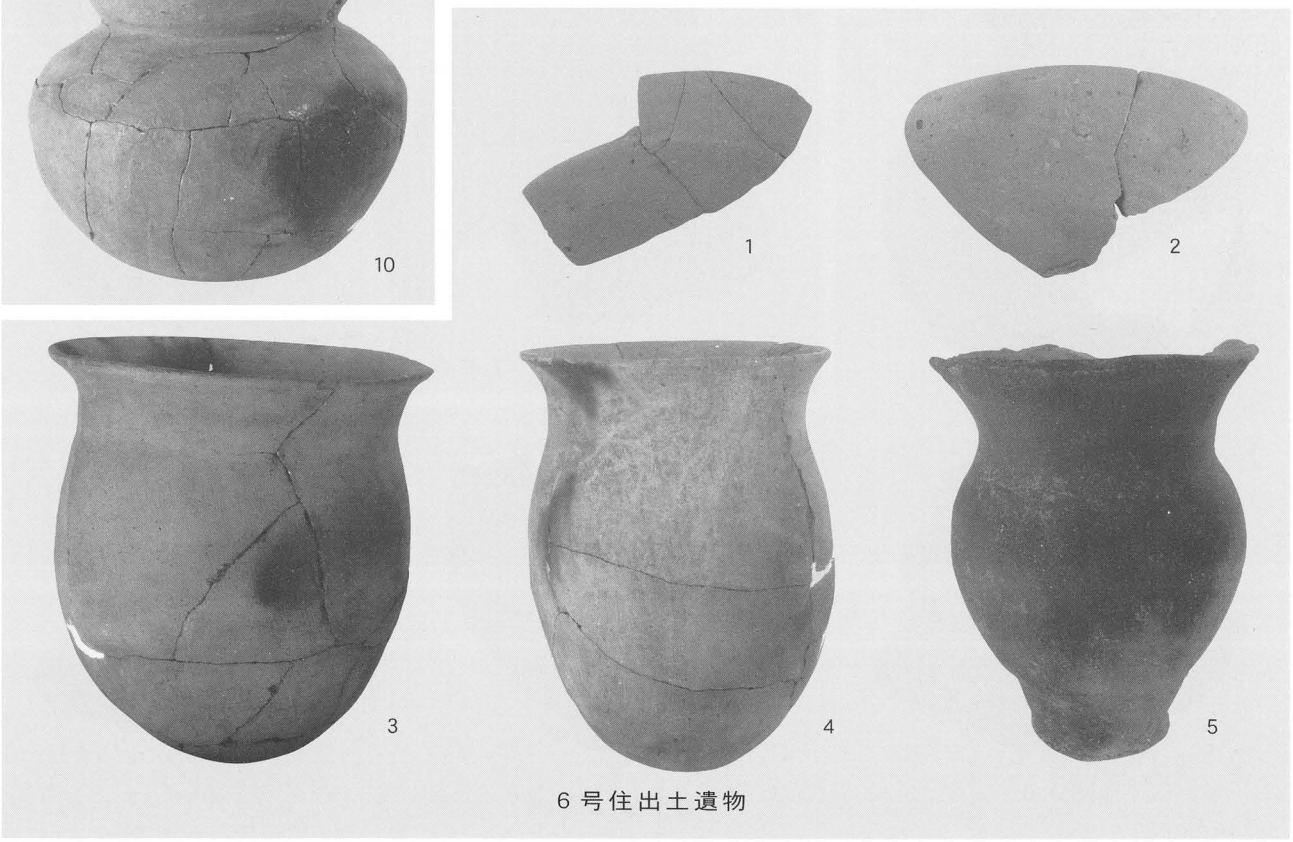
４号住出土遺物



５号住出土遺物

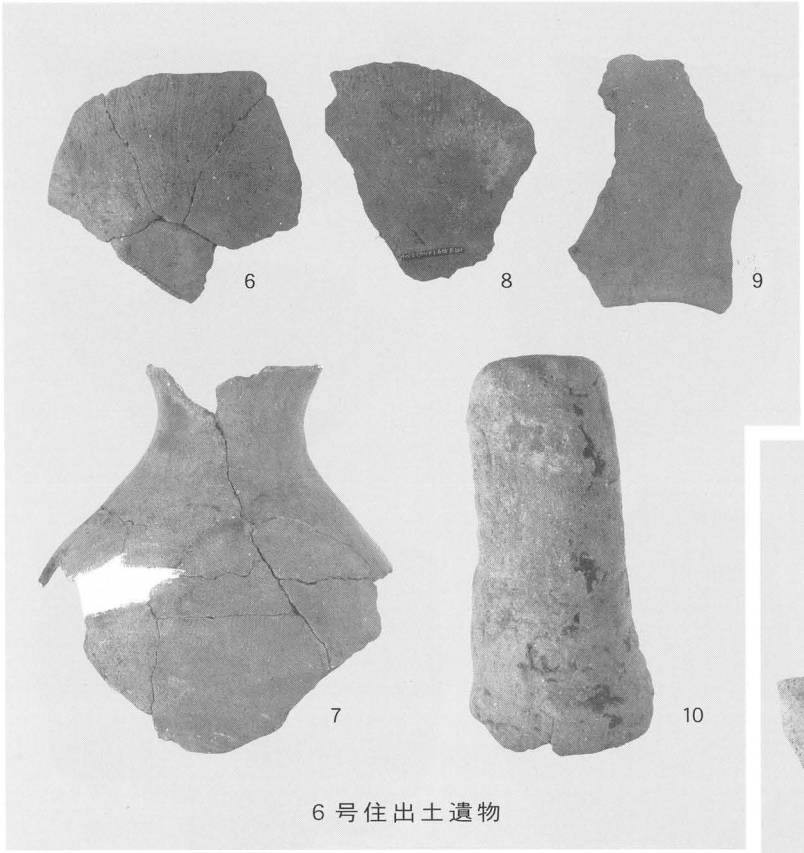


5 号住出土遺物

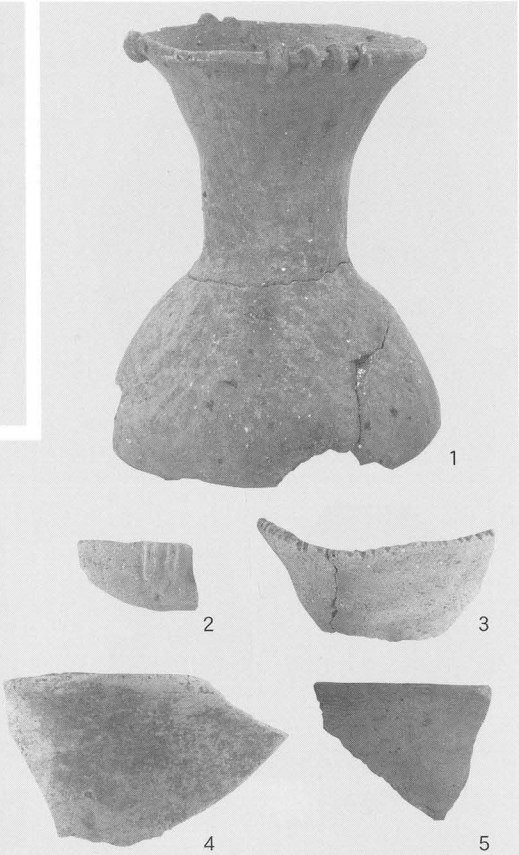


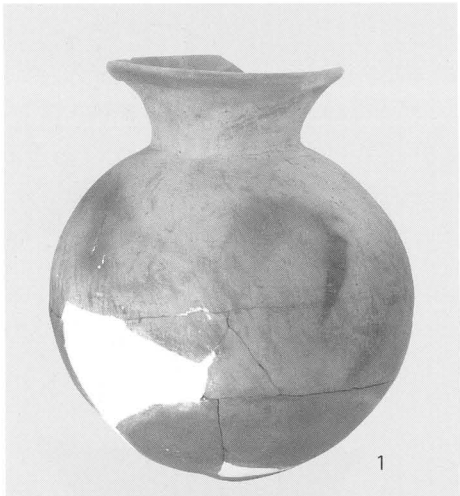
6 号住出土遺物

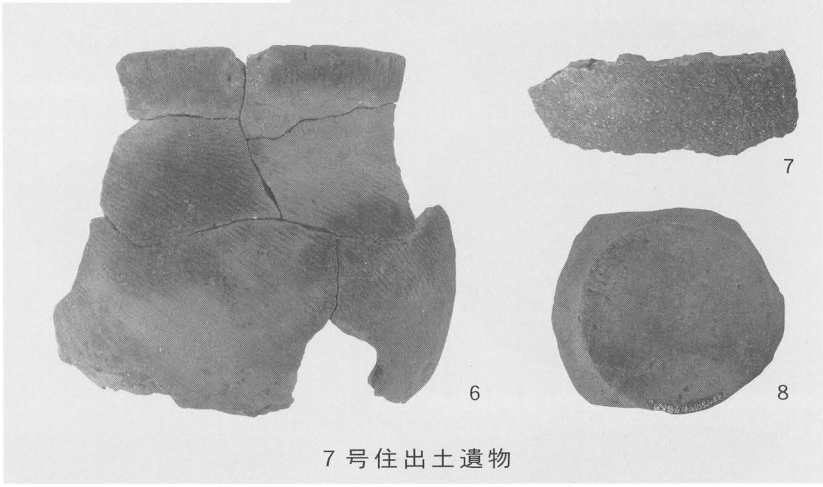
図版４



６号住出土遺物

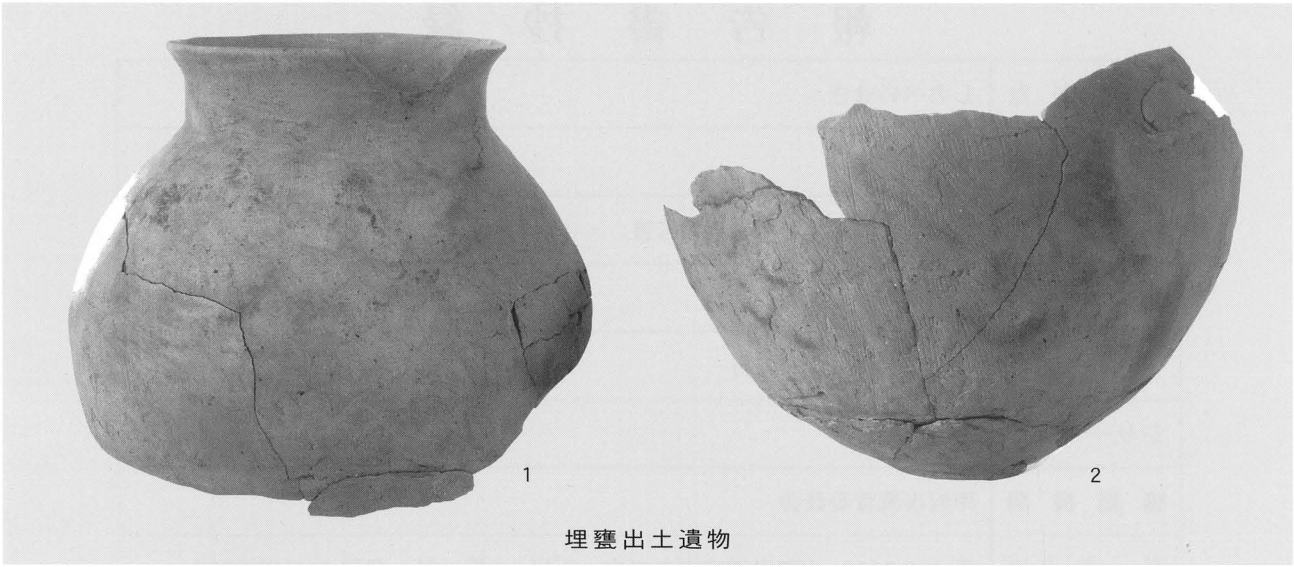




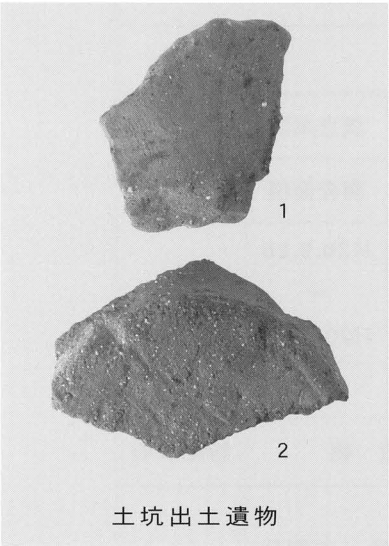


７号住出土遺物

８号住出土遺物

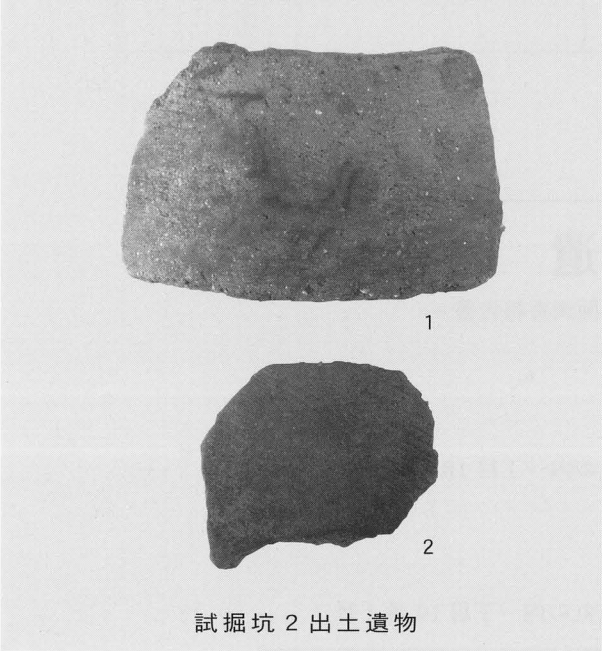


埋甕出土遺物

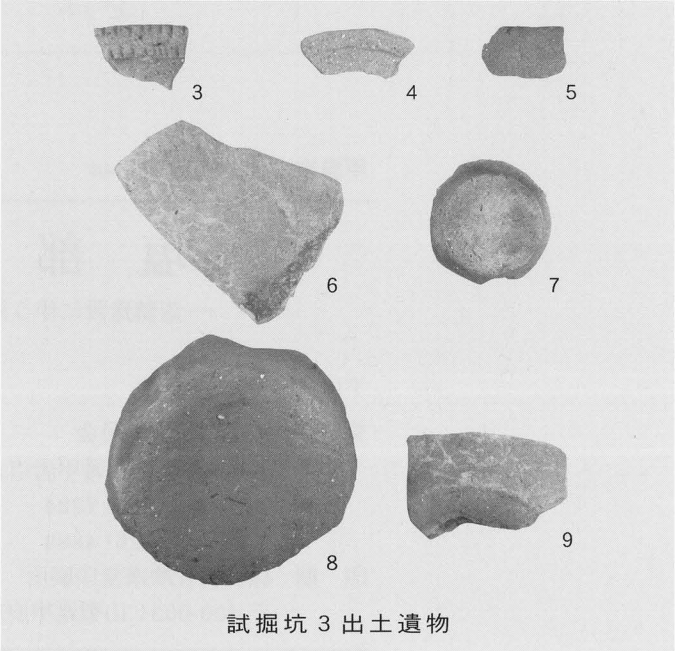


土坑出土遺物

遺構外出土遺物



試掘坑 2 出土遺物



試掘坑 3 出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	しおべいせき
書名	塩部遺跡
副書名	店舗建設に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	44
編集機関	甲府市教育委員会
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号　電話055(223)7324
発行年月日	平成21年3月27日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間 調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
しおべいせき 塩部遺跡	やまなしけんこうふし 山梨県甲府市 いいだいちちょうめ 飯田一丁目 2249-1, 2288	19201	43	35° 40′ 49″	138° 33′ 45″	H20.9.26 ～ H20.11.7 156㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塩部遺跡	包蔵地	弥生～平安	住居址・溝・ピット	弥生土器・土師器・石製品	

甲府市文化財調査報告 44

塩　部　遺　跡

― 店舗建設に伴う発掘調査報告書 ―

平成21年3月27日

発　行　甲府市教育委員会
〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号
TEL 055 (223) 7324
FAX 055 (226) 4889

印　刷　株式会社峡南堂印刷所
〒400-0031 山梨県甲府市丸の内一丁目10番1号